

キャプテン

丸井キャプテンの巻



原作
文

ちばあきお
小澤茂昌

目次

第1章 新キャプテン誕生

1・1 教室で………6

1・2 野球部の部室………7

1・3 グランドで………8

1・4 前キャプテン谷口の影………11

1・5 新入生近藤登場………14

1・6 ピッチャー近藤………19

1・7 丸井対近藤の対決………22

第2章 春の選抜大会

第3章 新制墨谷二中

2	・	1	選抜大会開会式	26
2	・	2	島田の鉄拳	28
2	・	3	試合開始	30
2	・	4	近藤の失策	33
2	・	5	ピッチャー近藤	35
2	・	6	絶体絶命	38
2	・	7	帰校中のバスの中で	42
2	・	8	ひとりぼっちの丸井	44
2	・	9	試合後のミーティング	46
3	・	1	野球部のうわさ	50
3	・	2	丸井の条件	51
3	・	3	日本一への決意	54
3	・	4	合宿開始	57
3	・	5	練習試合の朝	61
3	・	6	三十六校との練習試合	63

3・7	浦上中キャプテン	66
3・8	九回裏、川下中最後の攻撃	70

第4章 夏の地区予選大会

4・1	青葉学院対川中	80
4・2	球場更衣室で	82
4・3	墨谷二中对江東中	84
4・4	陰險な野球	86
4・5	墨谷快進撃	89
4・6	青葉部長の決意	90

第5章 夏の地区大会決勝戦

5・1	選手控え室で	94
5・2	試合開始	96
5・3	青葉の動揺	101
5・4	近藤の自信	104
5・5	ピッチャーイガラシ	106

付録A 付録

5・6	佐野降板！	111
5・7	すて身の青葉	114
5・8	死闘！ 十八回	117
A・1	ちばあきお小論	126
A・2	ちばあきお年表	134
A・3	あとがき	139

第1章 新キャプテン誕生

谷口が墨谷二中を卒業し、新チームが本格的に始動し始めた。墨谷二中野球部は目の前にせまった春の全国選抜大会に向けて練習に取り組んでいた。そしてとうとう今日は新入生が入部する日であった。

1・1 教室で…

新しく墨谷二中の野球部キャプテンとなった丸井も三年生になり生徒全員から注目をあびていた。

生徒A 「ヨオ新キャプテン！」
丸井 「ヨッ。」

生徒A 「すごい人気じゃねえか。」

丸井 「なにになに…」

生徒A 「おまえんとこ入部希望者が殺到してんだってなあ。まったくうらやましいぜ！」 おれんとこ柔道部なんてたつたの九人よ。まったく不公平な話だぜ。」

丸井 「そりゃちがうぜ。やることをやって実績をつくりやおのずと人はあつまってくるものよ。世の中つてえもんはそういうもんじゃねえかな。」

生徒B 「やっぱり言うことがちがうぜ。」

同じクラスの柔道部員と話をしていると、同級生の千葉が声をかけた。

千葉 「丸井、また上ばきまちがえたな？」

丸井 「いけね……」

女生徒A 「まだ足が地についてないのね。」

1・2 野球部の部室

放課後、部室から見えるグラウンドには大勢の野球部への入部希望者が集まっていた。

加藤 「また、ずいぶん集まったもんだぜ！」

島田 「まったく！」

加藤 「一年生にしちゃ、ずいぶんでかいのがあるなあ。」

島田 「なんせ、野球部に入りたくて越境^{えっきょう}入学したのも、そうというらしいぜ…。」

加藤 「やっぱり、なんだって全国大会で優勝したのがきいたんかな。」

島田 「そりゃ、そうよ！」

1・3 グランドで…

数多くの新入部員が整列して待っている。

加藤「では、キャプテンの丸井さんからあいさつを一言。」

丸井は新入生の前に立ち話し始めようとしたその時、一番からだが大い新入部員に目があった。

丸井「ボタンがはずれてるぞ。」

近藤「はあ？」

丸井「下だ、下っ。」

近藤「これなあ、チャックいいまんねん。」

丸井「いちいち口ごたえすんな。このう…きさま、なんてえ名前だ？」

近藤「近藤いいまんねん。」

丸井「ようくおぼえておこう。」

丸井「おれがキャプテンの丸井だ。みんなもしつてのとおり、わが野球部はまるで無名チームから全国大会優勝チームにのしあがったんだ！ それまで地区予選でさえ通過できなかったおれたちがたった一年でここまでこれたのはなぜだかわかるか。それは前キャプテンのおこなったおまえたちの想像を絶するような練習と努力があったからだ。おれもそれをうけつぐ。そしてより強力なチームにしていくつもりだ！ 安易な気持ちで入部したものはいまのうちにやめたほうがいいぞ。」

二、三年生は新キャプテン丸井のあいさつを聞きながら、お互いに顔を見合わせていた。

イガラシ「ちょっと、気合いがはいりすぎじゃないか…」

イガラシがつぶやくが、丸井は気がつくようすもなく新入部員に今日の練習計画を告げた。

丸井「ようし、じゃあ、おまえたちの今日のスケジュールを言う。最初からボールをにぎれると思ったらおおまかがいだぞ。まず全員で草むしり、それが終わったら用具の手入れと部室の掃除だ。さっそくかかれ！」

一年生「は、はい。」

丸井「ちょっと、待て。整列しろってんだ。」

丸井は外野の方に歩き始めた新入部員を呼び止めた。

丸井「きさまら、返事の仕方もしらんのか？ かかれ！」

一年生「はい。」

丸井「声が小さい！」

一年生「はいっ！」

丸井「もたもたするんじゃないねえ。」

一年生「はっ、はいっ！」

新入部員は全速で走った。その様子を見ていた部員達はあきれたような顔で丸井を見ていた。

丸井「へへーっ、こういうことは、最初がかんじんだからな。」

イガラシ「丸井さん。」

丸井「一応、キャプテンって呼んでくんねえか、立場上まズいんだよ。」

イガラシ「あ、どうも。」

丸井「で、なんだ？」

イガラシ「おれ、全国大会で肩をこわして、まだムリがきかないですよ。」

丸井「それで。」

イガラシ「あれだけいるんだし、選抜に補強できるのがいるかどうかテストしたらどうです。」

丸井「一年生は九月まで体力づくりって規則があるじゃねえか。それをまげて新入部員がしめしがつくと思ってるのか。それに谷口さんがリリーフとして、二人も準備してっただじゃねえか。」

イガラシ「しかし、谷口さんはその規則がありながらおれを使いましたよ。」

丸井「そういや、そうだな。たしかに谷口さんはそうしたな。」

イガラシの谷口という言葉に反応した丸井の決断は速かった。

丸井「新入部員、集合！」

外野に散らばっていた新入部員が集まってきた。

丸井「いいか、これからおまえたちをテストする。それに合格したものは選抜の補強人員にする。」

一年生「……？」

丸井「テストにそなえ、ランニングと柔軟体操をやってこい！ かかれっ！」

一年生「はっ、はい。」

一年生は言われたとおりにランニングを始めた。

近藤「すぐ、気のかわるお人やなあ。」

1・4 前キャプテン谷口の影…

選抜の補強人員にするテストのため新入部員がグラウンドをランニングしている姿を上級生達が見ていた。

イガラシ「どうです？ キャプテン。」

丸井「かなり、走りこんでるものいるな。この調子なら補強人員がでそうだな。」
イガラシ「それどころか、ひよっとすると、大幅にオーダーを変えることになるかも…。」

丸井「い…、今なんて言った？」

イガラシ「大幅にオーダーが変わりそうだったんです。」

丸井「バ、バカな。なに言ってるんだ。どうしてオーダーを変えなくちゃなんねえんだ？」

イガラシ「そのためにテストするんですよ。」

丸井「これはあくまで、補強人員としてよ。」

イガラシ「しかし、力のある者がいれば、レギュラーとして使ったって良いと思いませんがね！」

丸井「バ、バカな。いまのオーダーは谷口さんが決めたオーダーなんだぞ。それを勝手に変えようって言うのか。谷口さんはな、チームワークとかおれたちのためにと、よく考えて決めてくれたんだぞ！」

イガラシ「しかし、おれの肩も思ったほど良くならないし、リリーフの二人だってまだ完全に仕上がっていないでしょ。谷口さんのいたときは、状況がちがうんですよ。」

丸井「じ、じゃあ何か、おまえは谷口さんの決めたことにケチをつけようってのか！」

イガラシ「いや…そんなこと言ってるわけじゃないでしょ。」

丸井「ここまでなれたのは誰のおかげなんだ！ 谷口さんのおかげじゃないか！ 断っておくがな、おれは、誰がなんと言おうと谷口さんの決めたオーダーでいく！」

イガラシ「谷口さん、谷口さんって、今のキャプテンは丸井さんなんですよ。」

丸井「だ、だからなんだって言うんだ。」

イガラシ「もっと。自分なりの意見をもったらどうなんですかね。」

丸井「だ、だから谷口さん……。」

高木「くすつ。あつ……。」

丸井「わ、わかったよ。みんなもそう思ってたんだ。イガラシ、おまえがキャプテンやりやいだろ！」

イガラシ「ま、丸井さ、いやキャプテン！」

丸井「うるせえつ。おらあキャプテンおりたんだ！」

加藤「な、なにも、そんな。」

イガラシ「ほっとけ、ほっとけ。」

丸井はみんなに背を向け、グラウンドを歩いて部室に向かった。
一人部室の中に入り、落ちていたやかんをけとばした。

丸井「くそつ。つめてえやつらだ。全国大会で優勝できたのはみんな谷口さんのおかげじゃないか！ その谷口さんをどうこう言うやつらをおれは引っぱっていく気はない。」

丸井は自分のロッカーにしまつてある谷口前キャプテンの写真を手にした。



丸井「谷口さん……、うう……。」

グラウンドではレギュラーを中心とした二、三年生の話し合いがもたれていた。

高木「よわったな。」

小室「新入部員がはいって初日だって言うのに……。」

イガラシ「……。」

イガラシは自分が最初に言い出したことからのめごとに責任を感じていた。

イガラシ「よし、おれがもう一度話してみるよ。」

イガラシが部室に向かって歩き始めたとき。部室から丸井が歩いてきた。

丸井「やっぱり、続けるよ！ 谷口さんは最後の最後まで何事も投げするようなマネはしなかった。」

ナインはみなホッとした表情で顔を見合わせた。

丸井「全員集合！ モタモタすんな！ これからおまえたちの中に、レギュラーになれる者がいるかどうかテストする！」

一年生「レ、レギュラーだってさ。」

丸井「さあ、おまえたちも手伝ってくれ。」

イガラシ「すみません、ムリ言っちゃって。」

丸井「いいさ、谷口さんだって、きっとこうしただろうからな。」

イガラシ「……。」

1・5 新入生近藤登場

ランニングを終えた新入部員を前に丸井は今から行われるテストについて説明した。

丸井「おまえたちのなかでレギュラーになる自信がある者は前にでろ。ただし春の選抜に起用するから、いますぐつかえる者にかぎる！」

一年生A「は…春の選抜だってさ。」

丸井「自信のある者は前にでろ！」

一年生B「ちよつと……へへ……」

一年生C「すまないな……」

近藤「ちよつとおしてんか！」

一年生D「へへ、おれも！」

丸井「六人か、もう他にはいないか？ いないようだな。このテストはすぐ実践に使える者を選ぶことが目的だ。断っておくがきびしいぞ！ まず守備から始める。イガラシ、ノックしてくれ。」

テストはまず守備練習から始まった。イガラシが打った球をキャッチャーの小室に返球する基本的な練習のテストだった。

丸井「つぎっ！」

近藤「は、はいな。」

丸井「はいと言え、はいと！」

近藤「ワイ関西からきたんや、これ方言なんやねん。」

丸井「返事くらい、標準語を使え、気がゆるむ。わかったな！」

近藤 「はいな。いや…、はいやった。」

丸井 「ま、いい、続ける。」

イガラシ 「はい。」

「カーン」

イガラシが打ったなんでもないゴロを近藤はトンネルした。近藤は照れくさそうに笑ってごまかし、ナインはあきれた表情で近藤を見た。

近藤 「ハラ……アハ……。」

丸井 「で、てめえ、それでレギュラーになれると思ったのか。墨谷二中をなめるな、バカヤロウ！ つぎっ！」

守備のテストが終わり、次はバッティングのテストが始まった。

丸井 「よし、次はバッティングだ。河野投げろ。」

遠藤 「たった二人か。」

マウンドにはリリーフの河野が立った。守備練習を合格した二人が打席に立つが、そのうち一人が打球にさからわずに打つミート打法で合格した。

次の遠投テストのため外野に向かって歩き始めた丸井とイガラシだったが、守備練習で不合格だった近藤が丸井のところにやってきた。

近藤 「キャプテンさん、ワイにも打たせてえな。」

丸井 「おまえは失格なの、失格！」

二人の頭の上を打球が越えていった。おもわず二人とも立ち止まりバッターボックスに目をやった。

「カキーン。」

イガラシ「ぷっ…。」

丸井「まったく、あんなずうずうしいやろう、初めてだ。」

近藤「すんまへん。」

河野「はい。」

丸井「ふーっ……。河野、遊んでやれ。」

近藤「ワイかて、遊びでいうとるわけやおまへんで。」

丸井「てめえと遊んでいる暇はないんだよ！」

近藤「そんなこといわんと、一球でええんや。」

近藤「へへ…いかがです。」

丸井「河野！もう一球投げてみる。」

河野「は…はいっ。」

近藤「ほら、きた。」

「カキーン。」

今日の打球はライナーでセンターの金網に当たった。

丸井「つづける、河野！」

近藤「そう、こなくっちゃ。」

「カキーン、カキーン。」

近藤は河野の投げるボールをいとも簡単に外野に運んだ。

イガラシ「すごい、パワーですね。」

丸井「河野!」

丸井は指をまげて、ピッチャー河野にカーブを投げるように合図した。バッターボックスの近藤は河野の投げた変化球を見のがした。

小室「どうした、ストライクだぞ。」

近藤「ボールでもかまへんから、まっすぐ投げてえな。」

小室「バカが、試合でまっすぐ投げてくれて言えるか。さあ打ってみろ。」

河野が投げた二球目の変化球に近藤はまったくタイミングが合わずに、大きくバットが空を切った。

丸井「こんなことだろうと思った:。」

最終の遠投テストに残った一年生はたった一人。

丸井「ここらでいいだろう。いくぞ、キャッチャーっ。さあここから力いっぱいキャッチャーに投げてみる。」

一年生A「はいっ。」

一年生の投げた球は山なりのボールでキャッチャーに届いた。

丸井「ふーん、まあまあだな。」

近藤「あ、のう、キャプテンさん。たびたびなんです、ワイにも投げさせてえな。」

丸井は近藤を無視した。

丸井「今度はワンバウンドでやってみろ。」

一年生A「はい。」

近藤「ほな、ワイも！」

丸井「待て。投げたらクビだぞ。」

近藤「ク、クビ？」

丸井「どうした、投げろよ。」

近藤「クビね……。クビ……。いいでしょクビも！」

近藤はボールに語りかけるように投げようかどうしようか悩んだが、意を決したように投げた。その送球は矢のようにキャッチャー小室のミットにおさまったのだった。丸井とイガラシはぼうぜんとして近藤を見た。

近藤「あー、すっきりした。どうもお手数おかけしましたなあ。ほな、さいなら。」

立ち去ろうとする近藤の背中に向かって丸井が声をかけた。

丸井「ちよって待て！ も、もう一球投げてみる。」

近藤「なんぼでも、投げまっせ。ワイ、ピッチャーやってたんや。」

近藤の投げる球は吸い込まれるようにキャッチャーのミットに向かっていった。

イガラシ「マウンドから投げさせてみたらどうでしょう。」

丸井「う……。む。」

一年生A「あのう、ぼくは……？」

丸井「あ、もういい。」

1・6 ピッチャー近藤

全員が注目する中で新入生の近藤がマウンドに立った。

近藤「ほな、いきまっせ。」

初球をキャッチャーの小室に向かって投げ込んだ。

「ズバーン！」

キャッチャーミットから大きな音が鳴り響いた。

「す…すごい。」

一年生はもちろんのこと、墨谷ナインもその球の速さに驚くばかりであった。

小室「ほーっ、いて。」

丸井「つづける。」

近藤「ほい、きた。」

近藤は二球目、三球目と投げ込んだ。

小室「だ…、だれかかわって！ おねがい！」

小室がたまらず丸井のもとにかけよった。

丸井「本物だな、こりゃ。」

イガラシ「あの球なら、レギュラーとしてもうしぶんないですよ。」

丸井「ま、まてよ。そりゃ、あのピッチングは認めるさ。しかしなんだ、あの守備や、バッティングは…。」

加藤「そうだな、バントされたらいちころだぜ。」

丸井「当たり前だ!」

イガラシ「しかし、小細工であの球は打たれるとは思えませんがね。」

島田「うむ、それもそうだな。」

イガラシ「守備の方は、選抜までにおれがなんとかします。」

丸井「そりゃ、あめえな。そんなにうまくいくわけがねえ。」

イガラシ「そこを何とか…。」

丸井「たとえ、うまくいったとしても、チームワークのことも考えてみる。ずうずうしいといおうか、ふてふてしいといおうか、あれが一年生のとる態度か!」

高木「キャプテン。」

丸井「ん?」

高木「そりゃ、チームワークのこともわかりますが、イガラシの肩の故障のことも考えてあげたらどうですか。」

丸井「あ、そうだった。悪かった。おれ、ああいうタイプだいきらいなんだ。キャプテンさんと言われただけでムシズが走るんだよ。しかし場合が場合だし、キャプテンという立場上好ききらいで、人をはかるわけにもいかん。ま、心配するな。このさいおれがめんどろ見えてやるよ!」

イガラシ「すみません。」

丸井「ちよつとこい!」

近藤「はいな。いえ、はい。」

丸井がマウンドに立っている近藤を呼びよせた。

丸井「おまえをレギュラーにすることに決定した。春の選抜にまにあうようみっちりしごくから覚悟しとけ。」

近藤「おおきに！」

丸井「ただし、日がないから守備だけでもなんとかせにやあな。さっそく、始めるぞ。守備につけ！」

しかし、近藤は動こうとしない。

丸井「どうしたんだ？」

近藤「ワイ、守備なんかいややなあ。」

みんな近藤の言葉に驚いた。

近藤「だいたい守備の練習は必要あらへんで。さわれるような球なんか、ワイ絶対投げへんねん。」

みんなの驚いた顔に近藤はようやく気づいた。

近藤「ワイの言うてること、おかしいやろか……。」

その時だった。キャプテン丸井がバットをつかんだ。

「キャプテン！」

イガラシ「な、何をするんです。」

河野「あんなの相手にしなさんな。」

ナインが丸井のまわりを取り囲み、近藤とのいざこざをやめさせようとした。

丸井「かんちがいするな！ なあ近藤、さわらせねえって言ったな。投げてしろ！」

近藤「ほな！」

1・7 丸井対近藤の対決

マウンドには新人生の近藤がピッチャーとして立ち、バッターボックスにはキャプテン丸井が立った。

近藤「えんりょなく、いきまっせ！」

近藤は初球を投げ込んだ。丸井はあまりの球の速さにタイミングがあわず空振りしてしまった。ナインはそれを見て驚いた表情で勝負を見つめた。

近藤「いかがでっか、ほな、もうひとつ。」

近藤の投じた二球目、今度は球のスピードにあわせてバットを出したが、バックネットに当たるファールボールとなった。丸井は手のしびれから近藤の投げたボールが並はずれたボールだと感じたが、キャプテンとして打たないわけにはいかなかった。

丸井「さわらせねえだど？ どうした、さあ、どんどん投げろ！」

近藤「さすが、墨谷のキャプテンや…。ほな、これは…どや！」

近藤の三球目、丸井はバットの芯こそはずされたがピッチャーライナーの小飛球を打つ。守備のできない近藤はこのボールをよけることで精一杯だった。

丸井「なんだ、そのぶざまなかつこうは！ はやく次を投げねえか！」

近藤は自分が自信一杯に投じた打球が打ち返されたことで、マウンドから立てないでいた。

丸井「ちつとは、さめたか。えっ。小学生のガキどもとやってたのとはわけがちがうんだ！ しかも選抜ともなると、おれなんか足もとにもおよばないバッターがゴロゴロしているんだ。いい気になりやがって、まったく！」

丸井がマウンドに行きながらうなだれている近藤に声をかける。丸井は近藤のショックの大きさを感じ取って、近藤に励ましの言葉をかけた。

丸井「でもよ、そうがつくりするな。確かにおまえはなみはずれた球を持っている。守備さえしっかりすれば、レギュラーとして十分やれるんだ。だまされたりと思ってやってみな。まあ、おれも腹をたてたが忘れてやる。おまえもしっかりやれ！」

近藤「ようわかりました。おおきに……」

立ちあがった近藤はもとの近藤に戻っていた。

近藤「キャプテンさん。」
丸井「ん？」



近藤 「こういう方法はどやろかと思いまして:。」

丸井 「なんだ?」

近藤 「ワイ、絶対にバットにさわらせん球投げられるようになるさかい! ピッチングの練習だけっていうわけにはいきまへんか? ワイ、どうも守備はおもしろくないねん。」

「ガッン!」

丸井は持っていたバットで近藤を殴ってしまった。近藤はその場に倒れ込む。それを見たナインは全員マウンドにかけよって倒れた近藤の様子をうかがった。

丸井 「大丈夫だ。気を失っているだけだ。」

イガラシ 「何をするんだ、キャプテン!」

丸井 「何をするもねえ。こんなやつは、クビだ! おれがキャプテンをやっているかぎり、こんなやつのは入りは絶対に認めん!」

丸井は一人部屋に向かって歩き始めた。イガラシが後を追った。

イガラシ 「キャプテン、なんだいまのザマは! あれが人の上に立つ者の態度か! しかつてゐるんじゃない、あれはおこってんじゃないか、頭にきてゐるんじゃないか。」

丸井 「そうよ、頭にきて何が悪い。おれは仏さまじゃねえ。おれだっておまえの肩を考えて何度がまんしたんだ。しかしものには限度つてものがあるんだ。なんだ、あの態度は、こつちがちよとおだてりやつけあがりやがってよ。」
イガラシ 「それは当然でしょ。ついこの間までは小学生だったんです。あれだけの球をもつてりや、天狗にならない方がおかしいですよ。」

丸井 「だから、なんだってんだ! おれは立场上、あれ以上たった一人の天狗の相手をするわけにはいかねえんだよ!」

丸井の言葉を受けてイガラシもチームワーク優先にチーム作りをしようという丸井の気持ちを
を感じ取った。

丸井「このさい、おまえの肩の事もあるし、できるものならおまえがやってみたら
どうだ？ 確かに、やつが球がただものじゃないことは打ってみてわかつた。合
わせるのが精一杯でいまだに手がしびれている。」

イガラシ「いいんですか、ほんとに！」

丸井「その代わり、おまえがめんどろを見る。おらあやだかん」
イガラシ「じゃ、そうさせてもらいます。」

部室をでようとドアのノブに手をかけたイガラシだったが、何かに気がついたかのように振
り返った。

イガラシ「そのうちキャプテンも近藤とウマが合うようになりますよ、きっと。」

丸井「冗談じゃねえ、おれはああいったタイプがだいきらいだ。」

イガラシ「ぼくだって、最初はキャプテンにきらわれたじゃないですか。」

丸井「おまえなんか。今でも好きじゃねえよ。」

イガラシ「……。」

第2章 春の選抜大会

新チームが始動し、初めての試合が行われる春の全国選抜大会の日がやってきた。丸井のひきうる墨谷ナインは、前年度の優勝校という名誉をひっさげて、春の選抜にいどんだのである。

2・1 選抜大会開会式

春の選抜大会開会式当日、控え室では全国から集まった強豪たちが開会式を待っていた。墨谷二中の初戦の相手は広島の港南中だった。

墨谷二中は出場校の控え室となっている球場のいっかくで着がえをはじめていた。

近藤 「さすが三十二校もあつまとすごい人数やなあ。」

丸井 「三十二校といってもな全国各地区から選ばれたチームなんだぞ。」

近藤 「はい。」

会場には選抜出場校がところせましとひしめきあっていた。

竹田「ちよつとキャプテン、墨谷二中ですよ。」

内田「ちよつとあいさつをしてくるけえの。」

墨谷二中の初戦の対戦校の港南中キャプテン内田が墨谷二中のもとに近づいてきた。

内田「あのう丸井さんですね。」

丸井「え…なにか？」

内田「ぼくは港南でキャプテンをつとめてる内田です。」

丸井「港南…あ…、なんだ、きょううちとあたるんじゃないか！ よろしく、よろしく。で…きみ、どこを守ってんだい？」

内田「キャッチャーですけど…。」

丸井「ふん。ま、お互いになんばろうや。」

内田「じゃ、よろしく。」

港南中キャプテン内田はチームメイトのいる場所に戻っていった。

竹田「おどろいたのう、キャプテンのポジションも知らんのかよ。」

多賀「うちもなめられたもんじゃな。」

内田「ふふふ。よっぽど自信があるんじゃないろう。」

港南中学の内田は墨谷二中が自分たちのことを何も知らないことに気がついた。

2・2 島田の鉄拳

対戦校港南中学の試合前の練習をみながら墨谷ベンチでは、キャプテン丸井がナインに最後の注意を与えていた。

丸井「いいか、おまえたちは知らんかもしれんが、港南は全国大会にもでたことがあるって、広島じゃいちおう名のおっている学校らしい。しめてかかるんだぞ。」

近藤「しかし、そろいもそろってまっ黒やなあ！」

丸井「それだけ練習量がおおいってことだ。」

近藤「あ…なるほど。」

丸井「それから近藤。おまえは試合なれするためにライトにはいれ。」

近藤「ラ…ライトでつか。試合になれるんやったら、ここでもなれると思うんやけど……」

丸井「心配するな、おまえんこには打たせねえようにするから。」

近藤「いや、そういうわけやあらへんねん。なんていうたらええか……」

丸井「どうしたんだよ？」

近藤「えーと……。ライト守ってんのを知ってる人に見られたらかつちよわりいねん。」

丸井「なに〜。」

近藤の言葉を聞き丸井はおもわず立ち上がった。近くにいたイガラシ、加藤が丸井を制止した。近藤は何が起きたかわからず、キャプテン丸井を見た。その時だった。

島田「こゝ、こんどう〜！」

島田が近藤に向かって殴りかかった。

近藤「い…いきなり、なにすんねん。」

島田の怒りの鉄拳が近藤を襲う。一発、二発…。近藤は倒れ込んでしまう。

近藤の顔には鼻血が流れた。

近藤「い…いったい、なんやねん。だ…、だれか止めてえな！」

しかし、誰も島田を止めようとしなかった。島田は気がすんだのか、ベンチの隅に座りこんだ。島田がベンチにすわって、ようやく近藤も自分のしたことがわかった。

近藤「島田さんがライトやつてるといふのに、どうも失礼なこと言うてしめて、すんまへん。」

丸井「ひっこんでろ、この〜。」

島田に対して謝る近藤をキャプテン丸井が引き離した。しかし試合まえだというのに墨谷ベンチは最悪のムードになってしまった。

丸井「くそ〜なんてこつたい。」



2・3 試合開始

試合は墨谷二中の先行で開始された。

丸井「いいか、みんな。まず、よくタマを見てあわせていけ。」

円陣を組んだナインに向かって丸井は試合前の注意を与えた。一番はファースト加藤。港南中のピッチャーの初球をおもいつきりよくたたいた。打球はライトスタンドに運ぶもおしくもファールとなる。おもわず港南キャプテン内田はタイムをとってマウンドに向かった。

内田「どうしたんじや、サインが見えんのか？」

野口「い…いえ。」

内田「おちつけえ。」

野口「はい。」

キャッチャーであり港南中のキャプテンでもある内田がピッチャー野口に対しておちつくように声をかけるが、野口の投じた二球目、三球目と大きくはずれるボール球となった。たまらず、もう一度タイムを取ってマウンドに向かった。

内田「何を力んだんじや！ ええかやつらは青葉から十点も取ったチームなんじや。打たれてもとものなんじや。」

内田はピッチャーの野口に対して声をかけるが、野口は全国大会の緊張感から本来の表情にはほど遠い状態であった。

内田「よっしゃ。ええからどまん中投げろ…！」

野口「は…はあ？」

内田「心配するな。今のイガラシならなんとかかえせる。」

野口「わ…わかりました。」

四球目、加藤はライト前ヒットを打った。二番ショート高木も三塁線を抜くヒットを打つ。墨谷二中は初回ノーアウト一塁、三塁のチャンスをつかえた。三番はセカンドのキャプテン丸井。打球にさからわずにセンター打った。三塁ランナー加藤はタッチアップをねらう。加藤は余裕でセーフだと思ったが、港南中センター竹田の好返球にあいホーム寸前でタッチアウトとなってしまう。

久保「す…すげえ肩だ…。」

小室「こりや、なめてかかるとえらいことになるぞ。」

ツーアウト一塁。次は四番ピッチャーイガラシであった。イガラシは港南中野口の投じた真ん中の速球をジャストミートし、ボールをレフトスタンドに運んだ。ツーランホームランとなり。墨谷二中が先制点を奪った。

野口「す…すみません。」

内田「おまえは、おれのサインどおりに投げりゃええんじや。ええか、この回はぜんぶまんなかだぞ。そうすれば墨谷二中は油断する。墨谷二中はうちのることなんもしらんじゃけん。」

野口「は…はい。」

五番キャッチャー小室もセンターに抜けるかという当たりだったが、セカンド多賀のファインプレーでチェンジとなった。

丸井「さっきのセンターの返球といい、やっぱり選抜に選ばただけあってちょっとちがうな。」

イガラシ「こいつは、しめてかかったほうがいいですよ。」

丸井「さあ、がっちりこうぜ。」

「オウ！」

丸井の声にナインは声をだし、守備にちつていった。港南中は円陣を組みキャプテン内田がナインに注意を与えていた。

内田「ええか、やつのインシュートだけは、ぜったいに手を出すな。」

港南中先頭バッター多賀は初球の直球を見のがし、二球目のカーブをファールした。三球目のイガラシ得意のインシュートを打ちピッチャーフライとなってアウトとなった。

内田「どうしたんじゃ！」

多賀「おいこまれたけえ、つい手がでてしもうたんです。」

内田「おちついて、みていこうぜ！」

二番打者はセカンドゴロ、三番打者はセンターライナーとなってこの回は三者凡退で終わった。

丸井「なまいきに、けっこうあててくるじゃんか。」

イガラシ「それどころか、こりや、ひよつとするとひどいめにあいますよ。」

丸井「おい、へんなこというな。」

竹田「くそつたれ。三者凡退かあ。」

内田「あせるな、あせるな。今につかまる。」

初球のホームラン性の大ファールに萎縮^{いしゅく}した港南のピッチャーは二点を先取されたことでかえって落ちつきをとりもどしたのか、キャッチャーの好リードにこたえて、たくみなピッチングで墨谷ナインをかわした。いっぽうイガラシはしだいにくいさがってくる港南を全力投球でふりきった。試合は2対0のまますすんでいったが、しかし回をおうごとにイガラシのおとろえはかくせなかった。

2・4 近藤の失策

回は八回裏。港南の攻撃は打順よくトップバッターから始まった。

「カキーン！」

先頭バッターが三遊間を抜けるヒットを打った。

内田「さあ、イガラシをつかまえたぞ！　しかし、いちおうインシュートはすて
ていけ。」

竹田「まかせといってください。」

「カーン！」

二番打者はライトにあがる平凡なフライとなった。イガラシは打たれた瞬間ライトには一年生近藤が守っていることに気がついた。

近藤「オーライー、オーライー。」

ライト近藤はなんでもないフライを後逸してしまう。センター久保がバックアップした。ノーアウト二塁、三塁のピンチをむかえた。

港南中C「お…おいライトアナなんじゃないんか？」

内田「ライトにながしてみろ。」

港南中B「はい。」

セカンド丸井と、センター久保がライトよりポジションを変え近藤を援護した。しかし、それにもかかわらず港南中三番打者は球威の衰えたイガラシのタマをライトに流した。

丸井「オーライー、オーライー。」

丸井が取れそうな小飛球だったが、ライト近藤が突っ込んできて丸井と衝突したためボールはグラウンドに落ちた。二人のランナーが返って2対2の同点となった。打ったランナーは三塁に進んだ。ノーアウト三塁、墨谷二中のピンチが続いた。



2・5 ピッチャー近藤

丸井が近藤をマウンドに呼んだ。

イガラシ 「近藤、たのむぞ。」

近藤 「は…はい。」

丸井 「どうしたんだ？」

近藤 「す…すんまへん…。ワイのためにこんなになっちゃって。ライトというポジションがこんなに大変だということを初めて知りました。」

丸井 「それは、島田にいうセリフだ。それよりおまえは全力投球しておさえることだ。ベンチにすわっている島田もそれをのぞんでるだろう。」

近藤 「はいっ。」

ピッチャーがイガラシから近藤に変わった。味方応援席からもヤジが飛んだ。

「島田を出せ。」

「墨谷二中の名譽をきずつけるな。」

丸井 「うるせえな、この大事なときに。」

近藤 「まあまあワイが、タマ投げたらしずかになるさかい。」

丸井 「それもそうだな。」

ピッチャー近藤が投球練習で投じた一球目を見た港南中ベンチ、墨谷二中応援団、ともにそのタマのスピードに驚き、球場は一瞬静まりかえった。

多賀「は…はやいのう。」

内田「なあに、やつの守備はメチャメチャだ。やつの所にただはじきかえせばいいんだ。」

竹田「なるほど!」

港南中バッターは四番キャプテン内田だった。初球を見送ってバットを短く持ちかえるも二球目を空振りした。

近藤「これが、とどめやーっ。」

「ストライク、バッターアウト!」

審判の声が響いた。

丸井「その調子だ。近藤!」

キャプテン内田は次の打者にアドバースをした。

内田「ええか、タマにあてることだけに専念しろ。とてもおれたちにはじきかえせる相手じゃないぞ。わかったな。」

港南中五番打者はバットを短く持つて初球を打ちにいくがバックネットに当たるファールとなる。そして次のボールはボテボテのサードゴロ。イガラシがなんなくこのボールをひろってファーストに送球した。

「アウト!」

しかし近藤は一塁に走ったバッターをマジマジと見ていた。

丸井「どうかしたのか？」

近藤「ワイのタマを打つなんて…、すごいバッターやなあと思って…。」

丸井「あのね、港南ってのはね、選抜に選ばれたチームなの、わかる？ わかる？」

近藤「は…はあ。」

港南中内田は次の打者にアドバイスした。

内田「ええか、バントでピッチャー前にころがせ。やつの守備のまずさをつくより手はない！」

バッターは指示どおりにピッチャー前にバントした。

近藤「やや、なーんちゃってさ！　へへーっ。ワイはバントは…練習したんや〜。」

先ほどのライト守備とちがって、ゴロをさばく近藤はややぎこちないながらもタマをさばきファーストに送球した。

「アウト！」

三塁走者残塁となって、墨谷二中はからくもピンチをしのいだ。

内田「まずいのう、これじゃ手のうちようがない……。」

2・6 絶体絶命

回は九回、得点は2対2同点で墨谷二中最後の攻撃である。六番センター久保から始まるが、墨谷二中を調べつくした港南のバッテリーを下位打線ではとうてい打ちくずすことはできなかった。

「バッターアウト。チェンジ。」

審判の音が響いた。

丸井「くそっ、むーっ。こうなったら延長戦にもちこむしかない。たのむぞ近藤。」
近藤「まかせといてえな！」

先頭打者野口は投球練習をしている近藤を見ていた。

野口「どうしましょう。」

内田「なんとしてもあてるだけだ！」

野口「はいっ。」

先頭打者野口は初球から打ってでたが、打球は小フライとなった。

丸井「キャッチャー。」

小室「オーライ。」

その時だった。ピッチャー近藤がキャッチャー小室を妨害するかのように進んできてこのフライを落としてしまう。

丸井「キャッチャーって言ったのが聞こえねえのか。」

近藤「す…すんまへん。」

丸井「おまえはゴロいがいはすべておれたちにまかせりゃいいんだ！　でしやばりやがって。」

近藤「は…はい。」

近藤は気を取り直して次の打者に向かった。だがその一球目…。

野口「ふ、ふりかぶった。」

一塁ランナー野口はふりかぶったのを見て、二塁に盗塁した。近藤は思わず二塁にタマを送球した。

「ボーク！」

審判の声が響き、楽々一塁ランナー野口はセーフとなった。

丸井「て…てめえ、ランナーがいるのがわかんねえのかっ。」

近藤「そないことあらへん。」

丸井「……。」

イガラシ「すみません…。バントの守備練習でいっばいでセットポジションまでまわらなかつたんです。」

丸井「えーっ。じょうだんじゃねえ、草野球じゃねえんだぞ。じゃあみすみすランナーを三塁までやっちまうってことじゃねえか。」

近藤「キャプテンって心配性やな、ワイの腕を信頼してえな！」
丸井「信頼しろっていつてもスクイズされたらどうするんだ！」

近藤「スクイズってなんやねん。」

マウンドに集まった墨谷ナインは近藤がスクイズを知らないことに驚いた。

イガラシ「まあ、いまさらここでくさっててもしょうがないでしょ。みんなでなんとかカバーするしかありませんよ。」

丸井「……。」

近藤の打者に投げたタマはストライク。しかし二塁ランナー野口はこの間に三塁に進んだ。ノーアウト三塁。墨谷二中絶体絶命のピンチである。

近藤の二球目を打者はバントするもバックネットに当たるファールとなった。次のボールに対してもスクイズバントをしたが、ボールは三塁線をそれファール。三振となってしまった。ワニアウト三塁。まだまだ墨谷二中のピンチは続いた。

港南中C「どうします?」

内田「む…相手が相手だけにおまえのバントじゃな、もし空振りでもすると三塁ランナーをころしてしまふ。よしヒッティングにでろ。」

港南中C「はいっ。」

バッターは初球から積極的に打っていった。そしてかろうじてバットにあてたが、ボテボテのファーストゴロとなった。ファースト加藤は前進してなんなくこの球を捕った。サードランナーを牽制しベースカバーに入った丸井にボールを投げようとしたとき、ピッチャー近藤が一瞬誰もいなくなったファーストに向かって走り出した。

加藤「どけ、近藤！」

ファーストベース上でセカンド丸井とピッチャー近藤が交錯し、折りかさなって倒れた。それを見たサードランナー野口はホームに走り出した。

近藤「ま…丸井さん、すんまへん…。」
丸井「くーっ。」

丸井は近藤を払いのけるとボールをひろい、ホームに向かって投げた。ホームベース上でのクロスプレーとなった。

「セーフ！」

審判の声が響いた。丸井はその場にすわりこんでしまった。

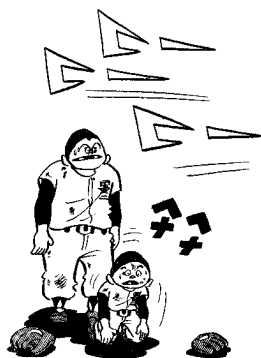
近藤「か…かんにんしてな、キャプテン……。」

丸井「さわるな。てめえのおかげで負けたんだぞ、チキショウ！ てめえさえ、でしゃばらなかつたらこんなことにはならなかったんだ。」

加藤「キャプテン、なにもこんな所で……。」

丸井「はなせよ！」

丸井は怒りをコントロールできずベンチに帰って行った。応援席から「やだねえ、いくら負けたにしろ、なんだいあの態度は…」と叱責しっせきの声が聞こえた。



2・7 帰校中のバスの中で：

敗戦のショックをひきずりながら墨谷ナインは学校に帰校しようとしていた。

丸井「今、だれが言った。おりてこいよ！」
小室「まま、なにも、そう興奮しなくても……。」
イガラシ「よしなさいよ、みっともない。」
丸井「てやんでえ！　こんなことになったのも、みんな近藤のせいじゃないか。」
丸井はナインに抱えられながらベンチに入っていた。

丸井「はなせてんだよ、このやろう。」

島田「すわれよ近藤。疲れただろう。」

丸井「よけいなことをするな。そんなやろうがすわるガラかってんだ。ヘマばかりしやがってよ。」

イガラシ「いいかげんしなさいよ、キャプテン。さっきから近藤のせいにはかりしてるけど、おれたちにも責任があるんじゃないですか？」

丸井「お、おれたちが何をしたってんだよ！」

イガラシ「どだい相手がどんなチームかも調べもしないで、選抜にのぞんだことじたいすでに敗因じゃないんですか。今日の試合にだって、相手ピッチャーが萎縮いしゆくしたから二点はとれたものの、それ以後一点もはいらなかったじゃないですか。」

丸井 「近藤のエラーさえなけりやその二点で勝ってたんだ。」
イガラシ 「いや…たとえ勝ったとしても、すぐつぶされました。たしかにおれたちは

名門青葉に勝って優勝しました。しかしそれには谷口さんという青葉をよく知った人がいたし、青葉に対する特訓までしたじゃないですか。ようするにたった一つの目標に努力すればよかったんですよ。しかし選抜ともなるとあらゆるチームに勝ちぬいていかなければならないんです。おれたち全国大会ってものを考えなおさなくちゃいけないんじゃないですか。」
丸井 「……。」

イガラシの言葉を聞き突然に丸井は立ちあがった。

加藤 「どうしたんですか、キャプテン。」
丸井 「おまえたち、先に帰っててくれ。」

丸井はナインには何も言わずに一人バスを降りた。取りのこされたナインは思い思いの気持ちで言葉を言った。

加藤 「なあ、イガラシ。こういうときこそナインを勇気づけてひっぱっていくのがキャプテンのつとめじゃねえのか？」

イガラシ 「あの人にそこまでのぞむのはムリだよ。」
加藤 「そのキャプテンがふてくされちゃってよ。」

小室 「ぶっ。」
加藤 「おれはどうていついていく気はないね。」
小室 「まったく。」

イガラシ 「よせよ、グチを言っただけみじめになるだけだ。」

小室「それより、いつもやる試合後のミーティングはどうするんだ？」
高木「キャプテンがいらないんじゃないでしょうかねえよ。」
島田「このまま解散するか。」

加藤「まあまてよ、キャプテンが帰ってくるまでおれたちだけでもミーティング
してようじゃないか。」
小室「そうだな。…だけど…みじめだね…。」

2・8 ひとりぼっちの丸井

バスを降りた丸井はイガラシに言われたことを思い出していた。「相手が
どんなチームかも調べもしないで、選抜にのぞんだことじたいすでに敗因
じゃないんですか。」

丸井「くそっ、キャプテンのおれが人前でわめきちらし、近藤一
人のせいにしやがって！ おれはしょせんキャプテンなんか
やるガラじゃねえんだ…。なんてダメな男だ……。」

丸井はひとりになってようやく冷静になることができた。近藤ひとりに試合の責任をおしつ
けようとしたこと、試合後も負けたたはらいせをみんなにあたりちらしたこと…。そういえば
相手チームのキャプテンは試合中味方ナインにいろいろな声をかけていた…。谷口さんだったら
こんな時どうするんだろう…。いろいろなことが頭をよぎっていった。



丸井「そうだ！」

丸井は反対側車線に行き、今きた方向とは逆のバスに乗った。丸井の行った先は先ほど試合が行われた球場だった。球場内で見学をしているチームを探していた。

丸井「あのう、墨谷の丸井ですが、キャプテンいますか？」

生徒A「ちよつとまってください。」

太田「キャプテンの太田です。さっきの試合はおしかったですね。で、なにか？」

丸井「じつは練習試合を申し込みにきたんです。」

太田「はあ？ いいですね。でも場所が……。」

丸井「ウチのグラウンドでもいいし、こちらからおたくのほうに出向いてもけっこうです。」

太田「出向くって、北海道までいらしゃるんですか？」

丸井「ホ…北海道だったんですか。それじゃムリだ。ど…どうも失礼。」

丸井は照れ笑いを浮かべてその場を後にした。北海道から選抜にのぞんだチームのナインからは笑い声がもれた。

生徒A「なんだい、あのキャプテンはおもしろい人だね。ウチがどこの出身かも知らないでさ。」

太田「笑いごっちゃないぞ。」

生徒B「はあ……。」

太田「普通、試合に負けりや、二、三日はがつくりくるもんだ。それをたった今試合に敗れたっていうのに、すぐ練習試合を申し込むなんてちよつとできることじゃない。」

生徒B 「そういや、そうだった。」
生徒A 「うむ…。」
太田 「おれたちも、ああなりたいものだ。」

丸井は球場内をテクテクと歩き、練習試合ができそうなチームを探した。

丸井 「あ…これもダメだ。九州じゃな…。くそう、なんとしても次の全国大会で優勝するためには、あらゆるチームに通用するように、練習試合ができる学校をみつけなくちゃ。」

丸井は球場内をつぶさに歩いてまわった。

2・9 試合後のミーティング

丸井は帰りのバスの中で今日交渉した相手チームを確認していた。

丸井 「えーと…。選抜から九校と、見学にきていた学校が二十七校、しめて三十六校か…。みんなたまげるだろうな。」

丸井が部室のドアを開けた。

丸井 「よう、待たせたな。なんだ、ミーティングを始めていたのか。ああくたびれた。」

加藤「よかったら、このままつづけさせてもらっていいですか。」

丸井「ちよつとまで、その前に大事な知らせがあるんだがな。」

加藤「われわれも、大事な事を話しあってるんですが。」

丸井「な…なんだい、その大事な事って？」

加藤「大変言いにくいことなんです…。丸井さんがキャプテンとして不適格ということが多数決で決まりました。欠席裁判のようになってしまいました。丸井さんが帰ってこなかったのです…。」

丸井は一瞬驚くも、今日のことを問われたらしかたがないなと感じた。

丸井「…：だろうな。たしかにキャプテンとしては適格じゃない。おれってカーツとなつて頭に血がのぼると何もわからなくなつちまうただからな。で…誰に決まつたんだい？」

加藤「それを、これから決めるところなんです。」

丸井「じゃあ、おれがいたらやりづらいだろうから帰る。」

丸井は帰ろうと部室のドアに向かって歩き始めた。

丸井「あ…その前に頼みがあるんだがな！ 実は帰りがけにバスの中でイガラシに言われてなるほどと思つてよ。あれからひきかえして練習試合を決めてきちゃつたんだがな、おしつけるようで悪いんだが、ムリに頼んだところもあるんでよ、キャプテンになる者はなんとかそれを実行してほしいんだがな……。そうしてくんねえとおれの立場なくなつちまうんだよ。わかるだろ。ここにスケジュールが書いてある。じゃ頼むな。」

丸井がドアを開け部室から出て行つた。取りのこされたナインは先ほどの話し合いの続きをおこなつた。

加藤「じゃあ、キャプテンを誰にするかなんですが……。」

イガラシ「その前にこの中にキャプテンになれるやつがいるのか、話しあったほうがいいんじゃないのか？」

島田「し…しかし、どんなときにも冷静であるべきキャプテンがああ感情にはしる人でいいのかな。」

小室「うーむ……。」

イガラシ「おれたちは丸井さんのことをどうのこうのいったがよ、チームのこれからのことを考えたやつがおれたちの中にいたか？」

加藤「そういや、おれたちがこうしているあいだに丸井さんは走りまわっていたんだな。」

ナインは静まりかえった。そして長い沈黙が続いた。

加藤「やつぱり、キャプテンは丸井さんしかないのかな……。」「

遠藤「だろうな。」

加藤「よし、もう一度みんなで丸井さんに頼みにいこう！」

島田「うむ。」

墨谷ナインは全員で丸井の後を追いかけた。

「丸井さ〜ん。」

イガラシ「キャプテンを続けてください。」

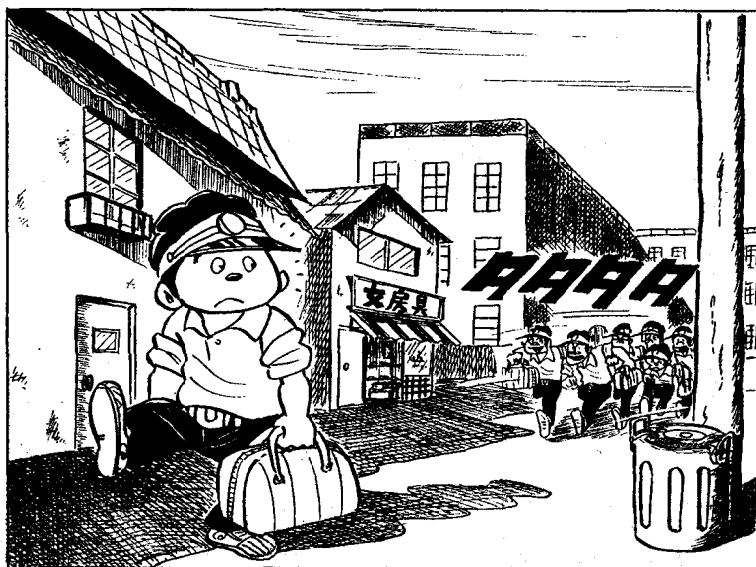
丸井「ええっ、おれにキャプテン続けるだつて。だ、だけど…。」

イガラシ「お願いしますよ。もう一度キャプテン引きうけてください。」

丸井「てめえら、あげたりさげたり勝手だなあ〜。」

「お願いしま〜す。」

丸井「ま、考えとくよ。」



第3章 新制墨谷二中

部員からキャプテンとして不適格の烙印を押された丸井は、ナインからのキャプテン再任の話を二つ返事で受けたわけではなかった。

3・1 野球部のうわさ

生徒A 「なんだい、野球部のやつらあんなに小さくなっちゃってよ。」

生徒B 「そりやそうよ、昨年の優勝校がたった一戦でやぶれちまったんだからな。しかも、うちをやぶった港南が第二戦で初出場校にコロッとやられちまったんじゃないやあな……！」

生徒A 「そうか、そりや昨年の優勝校にしたらバツがわるいよな。」

生徒B 「そのうえ、キャプテンの丸井がおりののりないのってゴタゴタしてるらしいぜ。」

生徒A 「ここんとこ、野球部もついてねえな。」

3・2 丸井の条件

ナインが続々と部屋に集まってきた。今日は丸井がキャプテン再任の条件をナインに提示すると約束した日でもあった。

島田「よう。」

加藤「よう…。」

島田「ところで、丸井さんキャプテンを続けてくれることになったのか？」

加藤「それが、引き受けるからには条件があるっていうんだ。で…今日、その条件を持ってくるんだとさ！」

島田「なんだろうね、条件で？」

加藤「あの人のこったから立場上的なことじゃねえか。」

それぞれがいろいろな思いで丸井のキャプテン再任の条件を推測していた。そこに丸井が部屋に入ってきた。

島田「こ、こんにちはキャプテン！」

丸井「キャプテン、キャプテンってきやすくよぶねえ！ まだ誰もキャプテンを引き受けるとは言ってねえだろ。まあつつたつてねえでかけろよ！」

主だったナインが部屋に集合し丸井の話を聞いた。

丸井「みんな、そろってるな！」

島田「は…はいっ。」

丸井「このたび、このおれにふたびキャプテンの座にすわってほしいという諸君の気持ちはどうくわかった。そしてキャプテンにはこのおれがふさわしいと思う諸君の気持ちもようくわかった。しかしキャプテンとしてそのおれがいったい何をしてあげられたのだろうか。選抜大会第一戦でみじめにも敗北を味わせたのが現実じゃないか！ さて、そこでふたび諸君のキャプテンになつてくれとの熱心な推薦を受けたのだが……、そんな諸君に何かしてあげられるだろうかと日夜トコトン考えてみた。そしてどんなチームにも通用するチーム……、いや真の日本一にきずきあげることが、このおれに与えられた使命だということに気づいた！ しかし、そのようなことが実際に可能であるかどうかいろいろ検討してみたのだが……」

久保「あのう、結局はやつてもらえるんですか？」

丸井「話は最後まできくもんだ。この……えーと……、今どこまでしゃべったっけ？」

久保「あのう、可能かどうかというところです。」

丸井「……で、可能にするためには練習しかない。それも想像を絶するような練習の積みかさねしかないという結論にたつた。その成果をためすのがおれが決めた三十六校との練習試合である。その三十六校との試合に全勝できるか否かによって真の日本一になれるかなれないかが決まるといっても過言ではない！ どうだ、諸君。三十六校をたたきつぶして真の日本一になつてやうではないか！」

あまりにもナインの反応がないことに丸井は疑心暗示に陥った。

丸井「お……おれの言つてることおかしいか？」

イガラシ「夢を大きくもつてことは大変けつこうなんですか……、選抜校もふくまれた相手に一日三校も対戦しなくちゃならないとなると……。」

加藤「そうだよな。」

島田「練習試合まで二十日ちょっとしかないってのにさ。」

丸井「ま、ま、ま。おれもはじめは不可能だと思っただよ。そこでだ、不可能を可能にする合宿プランを作ってみた。」

丸井「このプランについてくるならキャプテンを引き受けよう。これがおれの条件だ。」

加藤「ま、丸井さんをお願いしようじゃないか。」

島田「そうだな、どんなにくるしくったってみんないっしょだもんな。」

「お願いします。」

丸井「そ、そうかおれについてきてくれるのだな。ありがとう、ありがとう。おれも男だ！ ひきうけたからには野球部に命をあずけ、骨をうめるかくごでやるぞーっ。じゃあさっそく明日から合宿にはいるので一年生に知らせさせてくれ。」

高木「あ、明日って場所はどいうするんですか？」

丸井「講堂でたくさんだ。」

高木「でも許可をとらないと。」

丸井「昨日とっておいたよ。」

高木「わ、わかりました。」

合宿スケジュール

- 6時 起床
- 7時 朝食
- 8時 ランニング 柔軟体操
- 10時 守備練習
- 12時 昼食
- 1時 バッティング練習
- 3時 おやつ お昼寝
- 5時 ランニング 柔軟体操
- 7時 夕食
- 8時 ミーティング
- 9時 自由
- 11時 消火栓

高木「なんだ、はじめっからキャプテンをひきうけるつもりだったのか、まったくぎょうぎょうしい人だ。」

3・3 日本一への決意

めいめいが合宿場所の講堂に集まってきた。誰もが合同合宿ということであれしさを隠しきれずにいたが、イガラシだけが講堂の壁によりかかって一人考え込んでいた。

丸井「どうしたんだイガラシ、いやにしんこくな顔しちゃってよ。」

イガラシ「あ、キャプテン。」

丸井「なんか不満でもあるのかよ。」

イガラシ「いえ、べつに…。」

丸井「うそつけ、おまえがそんな顔したあととはかならずイチャモンつけるくせに。」

イガラシ「ははは、キャプテンにあっちゃんかなわないな。」

丸井「で、なんだよその不満てのは。」

イガラシ「じつはスケジュールのことなんです。」

丸井「……。ス、スケジュールのどこがきにいらねえってんだよ。」

イガラシ「いえ…、おれはキャプテンのいうどんなタイプの相手にも通用する、真の

丸井「じゃあ文句ねえじゃんか、このスケジュールでバッチリみんなをきたえて

だな…。」

イガラシ「バッチリね…。」

丸井「はつきりいえよ、おまえはこのスケジュールじゃ日本一になるのはむりだっ
ていいいのか。」

イガラシ「はっきрийやあそうです。」

イガラシに合宿スケジュールを否定されたことで丸井はイガラシに背を向けて立ち去ろうとした。

丸井「しかし…、イガラシにいわれるとなんか気になるなあ。」

丸井は立ち止まってふり向いた。

丸井「じゃ、おまえはこれをどうすりゃいいってんだ。」

イガラシ「どうって…方法は簡単です。練習時間を三倍にすりゃあいいんです。」

丸井「サ、三倍…。」

キャプテン丸井とイガラシの話にまわりの生徒達もようやく気づき始めた。

丸井「おまえ、いくらなんだって三倍…。」

イガラシ「さっき、キャプテンはみんなの前で三十六校に全勝すると約束しましたね。真夏という最悪のコンディションで、しかも一日三試合もやることになるんだから、それにたえられる練習をつんでおかなければ全勝どころか、試合にすらなりませんよ。しかもその中には選抜チームはもとより、準決勝まですすんだもうれつなチームがズラリとまちかまえているんですよ。本当に全勝する自信があるんですか？」

丸井「い…いや、なにも三十六校全部に勝てるとは…。意気ごみはあるんだけどさ…。おれ…、やっぱことわってこようかな…。」

イガラシ「ちよつとまってよ。キャプテンの意気ごみはでかすぎだと思う。しかし人間やってやれないことはない。このさい一発、日本一にかけてみたらどうです。三倍にしてね。」

イガラシは丸井が作ったスケジュール表の上から新しいスケジュールを書いていった。起床時間は四時半、六時からランニング、柔軟体操、三時からのおやつ、お昼寝の時間をカットしてトレーニングの時間にし、夜九時から十一時までトレーニングを追加した。八時からだったミーティングは夜十一時からになり、消灯は午前一時になっていた。

丸井「……。でもなあ……。そんなきついスケジュールでやったらほとんどの部員がついてこれないぞ。」

イガラシ「まあ、むりでしょうね。」

丸井「……。だいたいおまえはチームワークのことなんかどうでもいいと思ってんだから。」

イガラシ「しかし、大きく前進させようとするならそれなりの犠牲を覚悟しなくちゃできませんよ。」

丸井「うーん。しかしなあ……。日本一、三倍……か。」

遊び回っていた部員達もいつしか全員集まってきて、丸井の背中越しからイガラシと丸井の会話を聞いていた。

丸井「ようし一発かけてみるか。イガラシ全員を集合させろ！」

イガラシ「もうみんな集まってますよ。」

イガラシが指さす方向には野球部員全員が集まっていた。

3・4 合宿開始

野球部一年生が野球部部室前で泣きながら立っていた。

陸上部A「かわいそうによ、よっぽどつらいんだろうな。」

陸上部B「おれやつらの合宿スケジュールをみたけどよ、ありや人間を人間としてあつかってねえな。」

陸上部A「選抜の第一戦でやぶれた汚名をはらそうってんだろ。」

陸上部B「いくら汚名をはらそうたって、ありやいきすぎだよ。練習時間を増やすために睡眠時間をおおはばにけずったんだからな。」

陸上部A「なんせ、選抜校をふくめ三十六校を相手に一日三試合を消化して、それに全勝しようってのが目標ってんだからな。」

陸上部B「そりや、日本一になりたいのはわかるが、あまり目標が高すぎやしねえか。」

丸井が泣きながら立っている一年生の横を歩いている。

丸井「おめえら、メシを食わないのか。いつまでも、メソメソしてねえで、はやくかえっちまいな！」

丸井の言葉にもかかわらず一年生はそのままたちつくしていた。

丸井「かえれってんだよ！ やれやれ、一週間もたたないのに半分にへっちゃまうとは……。」

合宿中の練習は学年を問わず厳しく行われた。

「カキーン！ カキーン！」

一年生に対しての守備練習が始まった。

丸井「打つのやめろ！ ダメだダメだ。こいつらにこんなことやったって。おめ

えらグローブをすてちゃえ。」

一年生「なんにしてもたすかった。」

丸井「バーカ。こわがらずにタマを手のまんなかでとる練習をするんだ。」

一年生「……。」

丸井「はじめっ。」

グローブを捨てた一年生たちは素手で上級生がノックしたボールを取る練習を始めた。

丸井「ようし、つぎっ！」

近藤「あゝ、わてらも素手でっか。」

丸井「あたりまえだ。」

「カキーン！」

近藤の組も同じようにグラブを捨てて素手でボールを取る練習を開始したが、近藤はこわがって背中を向けてしまう。そこに丸井のケツバットがとんだ。

丸井「また、ケツをむけたらバットがとぶぞ！」

近藤「むぐぐ……。」

丸井「さ……つづけろ。」

丸井のケツバットの効果からか多少は前向きにボールを取るようにはなったが、それでも近藤はボールから逃げまわっていた。

丸井「あのやろう、まるでタマをとる気がねえんだな。」

イガラシ「キャプテン…、近藤ですがいっそピッチングの練習させたらどうですかね。」

丸井「あいっただけ特別あつかいしようってのか。」

イガラシ「あれじゃ、みんなに悪影響あたえるし…、まずいと思って…。」

近藤の班はみんな近藤を見習って気合いの入らない練習を続けていた。

丸井「それもそうだな。近藤！ おまえ向こうに行ってピッチングの練習でもやってみろ。」

近藤「ほんまにいいんてつか。」

丸井「目ざわりなんだよ、てめえは。」

近藤「うおっ。」

二、三年生に対しては一年生よりも距離の短い特訓の位置でのノック練習が始まった。一年生のノックの距離もじよじよにはあるが日がたつにつれて短くなっていた。

そして合宿はつづけられた。部員ひとりひとりが一所懸命どんなチームにも通用するように、そして真の日本一のチームになろうと。しかし真夏の日のてりつけるなかでのほげしい特訓が過酷かこくだったのか、特訓をはじめたとき八十六名いた部員も日がたつにつれ、つぎつぎ脱落していった。

そして十日目の夜…。

イガラシ「さあ、メシだぞ〜っ。」

丸井「あーはらへった。きょうの当番はイガラシか…。」

イガラシ「ええ。」

丸井「うまそうなラーメンだぞ。さあみなくえくえ。そーいやイガラシの家はソバ屋だったな。」

イガラシ「え…ええ。」

丸井「どうだみんな、いくらインスタントラーメンでもイガラシが作るとちがうだろう。」

加藤「そーいや、うまいな。」

高木「うん。」

丸井「なあイガラシ、これどうやって作ったかおしえろよ。」

イガラシ「そ…そのう…。まずあつい湯で三分間ゆでる。それで味つけスープをそのあとにいれるんです。それでもってえーと、ひき肉だの野菜なんかいためたのをいれて…するとたいへんおいしくいただけるわけ。」

丸井「コシヨウをいれろって書いてなかったか。」

イガラシ「あ…。」

丸井がナインをリラックスさせようと軽口をたたいた。ただそーいった中でも夜食を口にしない部員がいた。

丸井「どうしてソバをくわん。ムリをするんじゃねえよ。きょうまでこの合宿についてくりやじゅうぶんなんだからな。いま、荷物をまとめといてやるからな。それまで横になつてろよ。」

近藤「じゃ、ワイがソバをくってやるさかい。」

「パシ！」

丸井が近藤の手をたたいた。

丸井「タマをにげまわるようなやつにはくう資格はねえんだ。」

丸井、加藤、島田が協力して荷物をまとめた。

丸井「じゃあ気をつけてかえれよ。」

加藤「大丈夫かな、送っていかなくて。」

丸井「人の心配よりおれたちはスケジュールをこなすことだけを考えてりゃいいんだ。さああすのためにねようぜ。」

のこった二十三人はおたがいにはげましあい、さらに過酷かこくな合宿生活がつづけられた。しかし、体力の限界をこえるはげしい練習に部員たちは口をきく者もいなくなっていた。そして部員のひとりひとりがこの苦しさをのりこえることが、真の日本一につながるんだと自分たちにいいきかせ、一日一日を練習にはげんだ。

3・5 練習試合の朝

かくして、すべての日程を終え、特訓の成果がためされる朝をむかえた。総勢八十六名いた部員たちはすでに十一名にへっていた。

イガラシ「とうとう、やりましたね。」

丸井「なんだ、起きてたのか。」

イガラシ「ぐっすり、ねられましたか?」

丸井「いや、緊張してたせいか何度も目がさめたよ。」

イガラシ「キャプテンもですか、じつはおれもなんです。」

丸井「そういや、みんなも緊張してたせいかゴソゴソねがえりをうってたな。さあ、みんな、おきろ！ おきろ！」

高木「お…おい、いい天気だぜ。」

島田「む…。」

丸井「さあみんな、顔をあらってメシにしようぜ。」

「はいっ。」

丸井がみんなに声をかけ手洗い場に向かおうとしたが一人近藤だけがまだ寝入っていた。

丸井「おい近藤、いいかげんおきろよ！」

小室「あいかわらずだな。」

丸井「メシができるまでねかしとくか。」

小室「しかし、なんだかんだいったけど、よくついてきましたよ。」

丸井「まったく、まっさきに脱落すると思ったがよ。なんせ一年で残ったのはやつひとりだったからな。」

丸井が近藤のまくらをけとばしたが、何も反応しない近藤を見てみんなは笑いながら手洗い場にいった。

3・6 三十六校との練習試合

三十六校との練習試合の初日を迎えた。初戦校となる選抜大会で準決勝まで進んだ川下中が墨谷二中に着いた。

イガラシ「キャプテン、きました。」

グラウンドでキャッチボールをしていたイガラシが真っ先に川下中に気がついた。

丸井「よろしく!」

木村「いや、こちらこそよろしく!」

丸井「着がえは部室をつかってもらいましょうか。だれか案内してやって。」

高木「はい。どうぞこちらです。」

高木の案内で川下中ナインは部室に向かって歩き始めた。

丸井「さすが選抜で準決勝まで進んだだけあって強そうだな。」

川下中の後ろ姿を見ながら丸井はその落ちついた態度に自信を感じた。その直後だった。試合開始十二時からの明星中ナインがグラウンドに顔を見せた。

明星A「やあ、丸井さん。」

丸井「あれ…明星さんとは十二時からじゃなかったですか?」

明星A「ええ、それまでグラウンドをかりて練習させてもらおうかとおもいました。」

丸井「弱ったなあ。」

明星A「なにか？」

丸井「じつは、九時からほかとやるんで。」

明星A「すごいですね、変則ダブルヘッダーってわけですね。」

丸井「いや、変則トリプルヘッダー、なんていわないか、ようするに三校とやることになってるんですよ。」

明星中ナインはやや戸惑った表情で丸井の話を聞いていた。

明星B「どうします、キャプテン。かえりましょうか？」

丸井「かえるってたって、また昼でなおすんじゃ大変でしょうし、どうですそのあいだ観戦したら、あの木の下が涼しくていいですよ。じゃごゆっくり。」

明星B「なんだ、あれは。観戦だとよ、バカにしゃがって。」

明星A「ままだ、いちおう約束したんだし。」

川下中ナインは丸井から勧められた木の下に荷物を置いた。

明星B「もっと、相手をみて約束してもらいたいですね。」

明星A「もう、いうな。」

その時だった。部室から出てきた川下中に明星中ナインが気がついた。

明星C「お、おい、川下中だぜ。」

明星B「あいつらバカか、どだい一日三試合なんてハードスケジュールだってえのに、第一試合が選抜で準決勝まで進んだ川下中だよ。」

明星A「こぼしたってはいまらない。それより川下中とは今度の大会でかならず顔をあわせるはずだ。みんな、よくみとけ。」

明星中のライバル校である川下中が来ているとあって明星中ナインは目の色を変えた。そこに丸井がやってきた。

丸井「すいません、だれか審判をやってくれませんかね。」

明星A「よし、おれがいく。」

明星B「じゃ、おれは塁審をやろう。」

明星中キャプテンは川下中のエース小川の球質をまじかに見る絶好のチャンスだと思い、自ら球審を務めた。

「プレイボール！」

墨谷二中对川下中の試合が始まった。先行は墨谷、一番バッター加藤が左打席に入った。初球から加藤は積極的に打ちにでてピッチャーのグラブをはじく打球を打ち出塁した。二番バッター高木は送りバントをしたが俊足を生かして一塁セーフとなった。

「タイム！」

川下中キャプテン木村がタイムをとりマウンドに川下中内野陣が集まった。

木村「どうも選抜のときの墨谷とはちがうようだな。」

小川「うむ……。おまえら守備のほうたのむぞ、ちいとかきまわされそうだ。」

川下A「は…はい。」

ノーアウト一塁二塁となり得点チャンスとなった。そして三番丸井、四番イガラシと連続ヒットが続いた。

球審を務める明星中のキャプテンは川下中のエース小川の球質よりも、墨谷二中の的確なバツティングと機動力に驚いた。

3・7 浦上中キャプテン

墨谷二中が川下中と対戦している時に、校門の前には今日の第三戦目に対戦する浦上中があらわれた。

浦上A 「おい！ その綽^{しま}パン、野球部の連中はどこだ？」

生徒A 「し、綽パン…。し、失敬な。」

生徒B 「あいてになるな、ほっとけ、ほっとけ。」

浦上A 「きこえねえのか、なろーっ。」

生徒A 「き…、きこえますけど、なにも綽パンだなんて。」

浦上A 「おれたちはな墨谷の野球部のやろうらにドたまにきてんだよ！ 遠くからわざわざ練習試合にきてやったってえのにでむかえるのが常識だろう！ ええっ。」

生徒A 「ご…ごもつともで…。あ…あそこをぬけるとグラウンドです。はい。」

浦上A 「くそーっ、おれたち浦上中をなんだとおもってやがんだ！ なめやがって。」

生徒A 「す…すいません。どうも…。」

浦上中ナインは野球部グラウンドに向けて歩き始めた。

生徒A 「だけどなんだっておれたちがおこれなきやなんねえんだ。」

生徒B 「あったまくるな、もう！」

浦上A 「なんか、いったか。」
生徒A 「い…いえ、べつに…。」

浦上中キャプテンが野球部グラウンドにやってきた。

浦上A 「どういこうったい、よそのチームと練習してるみてえだぜ…。なんてもてなしかただ。」

第二試合目の明星中部員が浦上中ナインに気づいた。

明星B 「お…おい浦上中だぞ。」

明星C 「浦上中…。きいたことある学校だな。」

明星B 「あたりまえだよ、全国大会になんども顔をだしてるじゃないか。」
明星C 「え…、あの浦上中かよ。」

浦上A 「おめえらここでまってる。」

浦上中キャプテンはナインを待たせて、グラウンドにいる野球部員らしき生徒に声をかけた。

浦上A 「おい、丸井ってやろうはどいつだ？」

明星B 「あの…ぼくら二試合目にやることになってる明星のものなんです…。」

浦上A 「なんでえ、その二試合目ってえのは…？」

明星B 「やつら墨谷二中は、一日三試合やるそうなんです。はい。」

浦上A 「すると、おれたちは三試合目ってえことかな。」

明星B 「そうなりますね。」

観戦していた明星中部員から話を聞いた浦上中キャプテンは、ますます自分たちがコケにされたことに腹を立てた。その足で試合をおこなっているグラウンドに足を向けようとした時だった。

浦上B「キャ、キャプテンちよつとまって！　ちよつとみてごらんないよ。」

浦上A「選拔で準決勝まで進んだ川下中じゃねえか。」

浦上B「それよりスコアボードをみてごらんないよ。」

浦上A「ど…どういふこつたい、3対0で川下がやられてるじゃねえか。」

この回のトップバッター高木は三遊間を抜けるかという当たりを打ったが、ショートがこれを好捕した。しかしファーストへは返球することができず、内野安打となった。

次の打者は丸井だった。強打すると見せかけて手堅くバントでランナーを進めた。

丸井「ちくしょう、もう半歩でセーフだったのになあ。おい、イガラシダメおし
といこうじゃねえか。」

イガラシ「まかしといて！」

「タイム！」

たまらず川下中キャプテンでキャッチャーを務める木村がマウンドにかけよった。

木村「まずいのをむかえたな…。一塁があいているから歩かせるか。」

小川「しかし五番もゆだんができてぞ。」

浦上中はこの様子を遠くから見つめていた。

浦上B 「どうやら、川下のエース小川がそうとういためつけられているようですな。」

浦上A 「バカヤロ、人ごとじゃねえぞ…。」

浦上B 「し…しかしこんなことだとわかってりや、全員レギュラーをつれてくれればよかったみたいですな。」

浦上A 「いまからでもつれてくるんだ。」

浦上B 「…。あ、このう、これからあんな遠いところへ…。」

浦上A 「バーロー、さっさとつれてこねえかい！」

浦上B 「は…はい。」

木村 「じゃあ、とりあえず歩かせるつもりでくさいところをついていこうぜ。」
小川 「そうだな。」

「プレイボール」

イガラシは二球目のやや甘い真ん中よりきたボールを見のがさず打ちにいった。

「カーン」

打球はジャストミートしてセカンドの左を抜けるかと思われたが、川下中セカンドがこのタマを横つ飛びし、ダイレクトで捕球した。セカンド高木が飛びだしていたためダブルプレーとなつてこの回の攻撃を終えた。

「スリーアウトチェンジ！」

川下中のライトを守っていた和田が顔なじみの浦上中をみつけた。

浦上A 「あ。」

和田 「なんでえ浦上中じゃねえか。ちったあからだをあっためといたらどうだい。
ひどいめにあうぞ。」

浦上A 「は…はいっ。」

3・8 九回裏、川下中最後の攻撃

墨谷ナインはマウンドに全員集まった。

丸井 「さあ、この回さえおさえれば勝てるんだぞ。いいかおれたたちの目標である三十六校との練習試合の初戦をかざってやろうじゃねえか。ただし選抜で準決勝まで進んだ川下中がおいそれとは勝たしてくれねえだろう。最後の一球まで気をゆるめるんじゃないぞ。」

「オウ！」

全員で丸井の話を聞き、かけ声を出してそれぞれの守備位置にちって行った。

丸井 「たのむぞ、近藤！」

近藤 「はいな。」

近藤が投球練習を開始した。

和田 「回をおうごとにタマが速くなるみたいだな。この回も塁にでなけりや完全試合だぜ…。」

浦上C 「選抜のときより一段と球威がありますね！」
浦上A 「だまってみてられねえのかっ。」

この回の先頭打者和田は一球目、二球目と空振りした。

「タイム！」

たまらず、川下中キャプテン木村はタイムをとった。

木村「よくばるんじゃないやねえ、やつのだまを打ちかえそうたってむりなんだ。バットをみじかくもってあてるだけに専念しろ！」

和田「は…はい。」

近藤「おやおや、バットをあんなにみじかくもっちゃって。さあ、これがとどめやーっ。」

近藤は三振をねらって三球目を投げた。

「ガキ！」

にぶい音を出して打球はピッチャーの近藤の前どころがった。近藤が前進してきてこの打球をとろうとしたが、打球には変な回転がかかっていてとろうとした近藤のミットをはじいた。イガラシがすばやくバックアップして一塁に投げた。

「セーフ」

きわどいタイミングだったが内野安打となった。

「やった〜。」

小川「ひゃーっ、完全試合はまぬがれたぜ…。」

木村「やれやれ、ノーアウトでランナーがでたぞ。ねがってもないチャンスだ。いかなんとしてもこのランナーをホームにむかえるんだ。」

近藤「すんまへん…。」

イガラシ「今の打球じゃしようがないよ。」

丸井「それより、ランナーは足がありそうだから気をつけろ。」

近藤「はい。」

丸井「とはいうものの、大丈夫かなあ。あのやろうセットポジションおぼえたばかりだからなあ。」

川下中の次のバッターは初球をバントした。

近藤「またまた、そうたびたびエラーはせえへんで。」

近藤はこのタマをすばやく処理したが、まにあわないセカンドに投げてしまった。

「セーフ！」

「やった〜っ。」

木村「ようし、なんとしてもランナーを二塁三塁におくるんだ。」

「タイム！」

丸井がタイムをとった。

丸井「どこへいくんだ近藤？」

近藤「だってキャプテンすぐけつとぼすやんか。」

丸井「け…、けつとぼさないからこい！　なあ近藤、おまえセカンドに投げてまにあうと思ったのか？」

近藤「い…いえむちゅうやったもんで…。」

丸井「バーローよくみて投げろ。」

セカンドにかえろうとした丸井だったが何かに気がついたようにイガラシを呼び止めた。

丸井 「ようイガラシ。」

イガラシ 「はあ。」

丸井 「ランナーを塁にだすと近藤はまるつきりダメだ。あいてがあいてだしこの
さいおまえが投げたほうがいいんじゃないか。」

イガラシ 「おれ、このあとの試合に投げなくちゃなんねえし、もうちょっとようすを
みたらどうですかね。」

丸井 「そうかなあ、なんかまかせきれねえからな、近藤は。」

ノーアウトランナー一塁二塁で川下中は次の打者もバントをした。

近藤 「おっと、まったくバントばかりやんか！」

近藤はサードイガラシの指示でボールを一塁に投げた。

「アウト！」

丸井 「ドンマイ、ドンマイそれでいいんだ。」

ワンアウト二塁三塁となった。

近藤 「さあ、あとふたりで完封や。へへ…スクイズするかもしれへんからセット
ポジションね！」

川下中は初球をスクイズバントした。近藤はこのタマに飛びつき、キャッチャーに投げたがこのボールがとんでもない悪送球となってしまった。キャッチャー小室がボールをおいかけ、サードイガラシがホームをカバーした。川下中セカンドランナーがホームに突っ込んだ。

「セーフ」

「タイム！」

再びキャプテン丸井がタイムをとった。

丸井「ま…またやってくれたな近藤！」

イガラシ「よしなさいよ、キャプテン。」

丸井「なにもしやしないよ。まにあわねえのになんだってホームに投げたんだよ。さっきいったろ。」

近藤「す…すんまへん。完封したかったもんやから、つい…。」

丸井「バカヤロウ、てめえひとり野球やってんじゃねえ！」

近藤「あいてーっ。」

丸井「だからイガラシおめえが投げろっていったんだ。」

イガラシ「ちよつとまってください。そんなことをしたら残り三十五校とのスケジュールがメチャメチャになってしまいますよ。」

丸井「なにいつてやがんだ、全勝するって目標が初戦でつまずいたらもともこもなくなっちゃうじゃあねえか。」

イガラシ「ええ、たしかに全勝するのも大切です。しかしもっと大切なことは全国大会で優勝することじゃないんですか？ そのためにも、近藤にこういう経験をさせとく必要があるんじゃないですか。」

丸井「おめえが、キャプテンかよ。」

イガラシ「いえ…、おれなりの意見をいったまでです。」

丸井「じゃあ、おれはキャプテンとしてはじめにきめた三十六校を全勝したうえで、全国大会に優勝させるつもりだ。」

イガラシ「そりや、川下に勝つことはむずかしいことじゃないですよ。し

かしおれたちの相手は川下だけじゃないんですよ。」

丸井「おれは初志をまげるつもりはない。」

イガラシ「じゃ、おさえましょ。」

丸井「さあ、おめえはライトだ。」

イガラシ「やれやれ…。」

マウンドでのやりとりが川下中ベンチにも伝わった。

川下B「きいたか、おい。おさえましょうだとよ！ なめやがってこのう。」

小川「選抜は初戦でやぶれたてえのによくいうぜ。」

木村「よせよせ、こんな試合やってちゃんめられたってしかたがないぞ。むこうはスケジュールにしたがって試合をしてたってえのに、こっちは全力でぶつかってこのありさまだ。これいじょうみじめなおもいをしたくなくや勝つしか方法はないんだよ。」

川下B「よ…ようし、やってやろうじゃねえか。」

小川「そうよ、なめられてたまるかってんだ！」

川下B「たのむぞ、斎藤。ランナー二塁で一打同点だ。」

斎藤「まかしとけて。」

イガラシは二塁に牽制球を投げた。二塁ランナーはあわてて塁に戻った。



イガラシは一球目、二球目をコーナーをついた速球でストライクをとった。そして三球目はカーブを投げた。バッターはタイミングがはず空振りした。

「ストライク、バッターアウト!」

斎藤「おい、てごわいぞ。」

小川「む。」

木村「タイム! 川崎おまえああいう変化球に強かったな。」

川崎「え…ええ。」

木村「よし、おまえいけっ。」

川下B「ちょ…、ちょっとまってくださいキャプテン。もし逆転できずに延長になったらどうするんですか? やつしか墨谷に通用するピッチャーはいないんですよ。」

木村「ねぼけたことをいうんじゃないねえ。延長にはいつて勝てるあいてだとおもってんのか! それともおまえらがあのリリーフを打てるというなら話はべつだが。いいかランナーが二塁にいるいましか勝つチャンスはないんだよ。さあ、いけっ。」

川崎「は…はいっ。」

川下中のピンチヒッター川崎は初球から積極的に打っていった。初球はバックネットにあたるファールとなった。イガラシは二球目を投じた。

「カキーン」

打球はライトフェンスにあたった。近藤がこのボールを追いかけた。フェンスにあたったボールをとった。セカンドランナーはサードベースをまわった。

「近藤、バックホームだあ」

遠く内野陣の声をききながら近藤はホームベースに向かって全力で投げた。近藤のタマがキャッチャー小室のミットにダイレクトでおさまリ、小室がタッチした。ホームベース上でのクロスプレーとなった。

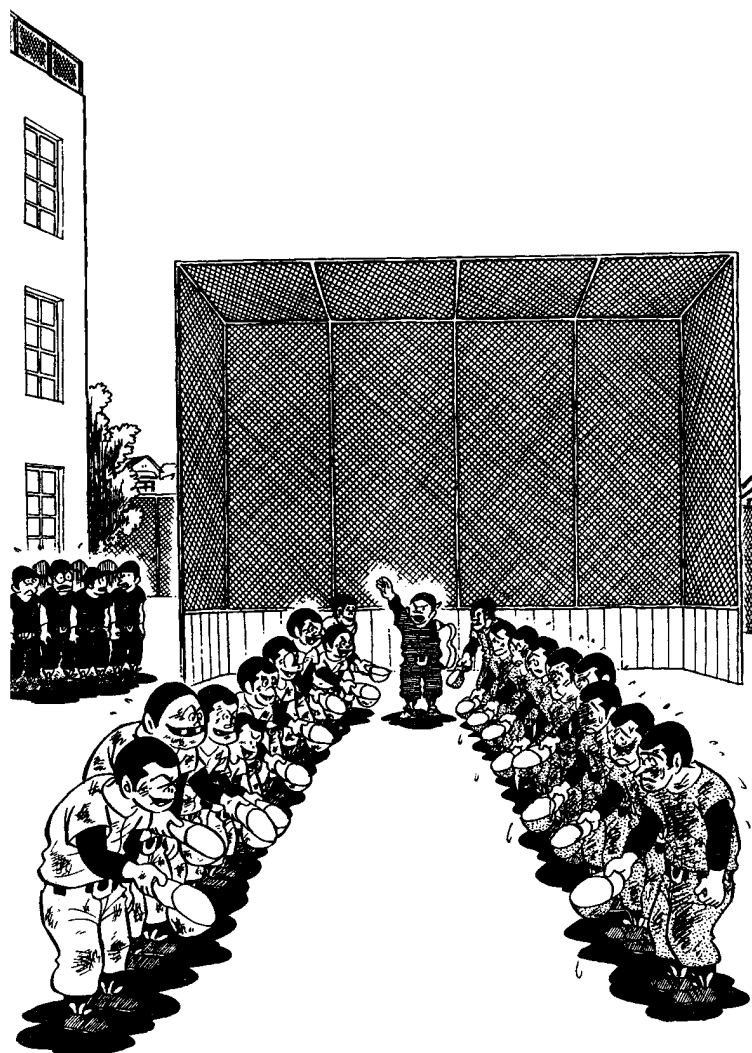
「アウト！」

近藤「やった、ワイのタマでアウトにできた。」

近藤は初めてチームの勝利に貢献できたうれしさから、今ボールを投じた自分の右手を見つめてつぶやいた。

苦しみながらも3対2で選抜大会ベスト4の川下中に墨谷二中は勝利した。

想像を絶する合宿による特訓にたえぬいたナインは、総数三十六校という強行なスケジュールにもかかわらず、川下中の勝利をかわきりに全勝という偉業^{いぎよう}をなしとげた。そして地区予選大会をむかえるのであった。



第4章 夏の地区予選大会

夏の地区予選大会がとうとう幕を開けた。墨谷二中は前年度優勝校ということでシードされ、今日の四回戦からの出場となった。そしてライバル青葉学院もともに今日の四回戦から登場した。

4・1 青葉学院対川中

記者B 「たかが、地区予選だっていうのに人が多いね。」

記者A 「そりゃそうよ。今日からいよいよ第一シード校青葉学院と墨谷二中が登場するんだからな。」

球場では青葉学院と川中とが対戦していた。青葉学院の先行で始まり三回青葉学院の攻撃中だった。

観客A 「相手じゃないね。」

観客B 「まるで、おとなと子どもだ。」

記者A 「しかしすごいね。あれで青葉は二軍だっていうんだからな。」

それもそのはず、青葉学院は対戦相手をよせつけず、一回には四点、二回には二点、そしてこの三回も相手投手から連続ヒットを打ち続けているところだった。

記者A 「よっ、墨谷二中の登場だぞ。」

丸井 「やあ、しばらく!」

記者A 「なかなか調子がよさそうじゃないか。」

丸井 「まあまあってとこですよ。」

記者A 「きくところによると、三十六校と練習試合をやって全勝したんだってね! それくらい、そうとう力をつけたってうわさでもちきりだよ。」

丸井 「いやあ、なにに。ところで青葉はどうなんです。」

記者A 「あいかわらず、地区予選は二軍におまかせだよ。」

丸井 「なるほど。」

記者A 「それよりちよつとごらんよ。ほらあそこ。」

顔見知りの新聞記者が指さした方向には青葉一軍の選手達が試合を観戦していた。

記者A 「一軍は報道陣をいっさいシャットアウトして猛特訓をしていると聞いていた。練習時間をさいてまでここに来ているところをみると…。どうやらマトは君たちのようだな。」

丸井 「うらやましいね。層があついと。じゃあ着がえてきますから。」

記者A 「がんばれよ!」

丸井がナインの先頭に立って更衣室に向かおうとしたその時だった。観衆が一斉に歓声を上げた。後方にいた墨谷ナインがおもわずグラウンドを見た。

丸井「どうしたんだよ。」

島田「青葉にスリーランホームランがでたんです！」

丸井「ぐずぐずしてねえで、はやくこねえか！」

加藤「キャプテン、いちおう見といたほうがいいんじゃないですか！」

丸井「バーロー。おれたちや二軍と試合するんじゃないやねえっ。」

加藤「は…はい。」

あまりにもぐずぐずしていたナインに大声で丸井は声をかけた。その声に観戦していた青葉一軍選手達も墨谷二中に気がついた。

小室「お…おいつ。き…聞こえちゃったらしいな…。」

小室が青葉一軍の変化に気がついた。

中野「うちの二軍もなめられたもんだぜ。」

佐野「さうとう自信があるんだろうよ。」

4・2 球場更衣室で…

丸井を先頭に墨谷ナインは更衣室にはいり着がえをしようとしていた。

丸井「よし、このへんで着がえるか。」
島田「キャプテン。江東中じゃないですか。」

島田が指さす方向には対戦校らしきチームが着がえていた。

丸井「そうらしいな、ちよつとあいさつしてくるからよ。」

丸井「江東中さんですね。」

江東捕手「はあ。」

丸井「墨谷の丸井です。どうぞおてやわらかに！」

江東捕手「いゝいえ、こちらこそよろしく。」

丸井「じゃあおたがいにがんばりましょうや！」

江東捕手「ど…どうも。」

丸井は簡単なあいさつをして墨谷ナインのところに戻っていった。

島田「そう強そうなチームにはみえませんか。」

丸井「まるで相手じゃないね。」

近藤「じゃ、かつちよくコールド勝ちといきまつか。」

丸井「…。バローなめんじゃねえ！ みかけはどうあろうと三回戦を勝ちぬいてきたチームなんだ。」

イガラシ「まあまあキャプテン、きょうのところはおれにまかせてもらえませんか。」

丸井「えっ…。」

墨谷ナインが着がえをしているところに部屋のドアが開いた。

審判「試合が青葉の三回コールド勝ちで、はやまったけど用意はいいかね？」

遠藤「は…はあ。」

丸井「また、ずいぶんはやいな。おっいこうぜ。」

4・3 墨谷二中对江東中

墨谷ナインがグラウンドにはいると待ちかまえていた応援団から大きな声がかかった。

「フレ、フレ、すみや！ フレッ、フレッ、すみや！」

それを見ていた対戦校の江東中応援団も負けじと声を出した。

「かーて、かーて、こうとう！ かて、かて、こうとう！」

江東中B 「勝て勝て江東だつてよ！」

江東中C 「なんとか勝ちたいもんだな。」

江東中D 「しかし、もしここで勝ちゃあ大金星だぞ。」

江東捕手 「バカヤロウ。そんな弱気じゃコールドゲームで負けちまうぞ。なんとか九

回までもたせるんだ。」

江東中D 「はあ……？」

試合前の両チーム並んでのあいさつが終わり、後攻の墨谷ナインは守備位置にちつていった。先発の近藤が投球練習を開始した。

イガラシ 「調子いいじゃねえか、近藤。」

近藤 「は、はい。」

イガラシ 「今日はおまえの好きなように投げていいぞ。」

近藤 「ほ…、ほんまでつか！ で…でもキャプテンさんが…。」

イガラシ 「心配するな。おまえのことはすべて、おれがまかされてんだから…。」

近藤 「イガラシさん…。」

イガラシ 「よせよ、気持ちわるい。」

近藤 「よ…ようし！」

近藤はイガラシの「好きなように投げていい。」の言葉をうけて、力いっぱいボールをキャッチャーの小室に向かって投げこんだ。

「プレイボール！」

試合が開始された。

近藤の投球は圧巻^{あっかん}だった。三人を三球三振。江東中もただ打席に立っているだけではなく、バットを短く持ちそしてバットをねかせてタマを当てにきたが、近藤の投げたボールは思っていた以上に速かった。

江東中C「こ…これじゃ点をいれるどころじゃねえな…。」

江東捕手「うわさには聞いていたが、まさかあれほどのピッチャーだとは思わなかったぜ…。」

「ストライク！ バッターアウト！ チェンジ！」

「いいぞ近藤！ つ。ナイスピッチング！」

応援席からも近藤の投球の素晴らしさに声がとんだ。そして観戦中の青葉学院選手達も…

青葉捕手「はやいな。」

佐野「うむ。」

二軍投手「はやいことははやいですが、ど真ん中ばかり投げるなんて、ちょっとあらず

ばくないスカ、先輩。」

佐野「あの調子ならおまえら二軍に手がでないタマでもあるまい。」

二軍投手「そ…そうスカね。」

佐野「たよりねえ返事だな。」

墨谷二中は近藤の活躍で簡単に一回の表を0点におさえた。

4・4 陰険な野球

一回裏墨谷の攻撃に変わった。

丸井「さあ攻撃だぞ。」

丸井はとなりにすわった近藤に気がついた。

丸井「シナロー、三球三振なんてかっこうつけやがって！」

近藤「へへ…。」

丸井「さあ、たのむぞ高木！」

高木「は…はいっ。」

イガラシ「いいタマおもいきって打っていいこうよ。」

一番高木はピッチャーの初球をセンター前に運んだ。

「ナイスバッティング！ いいぞ高木ーっ！」

応援席からも声がとんだ。

小室「たのむぞ加藤。」

イガラシ「一発、かましてやれっ。」

加藤「ようし。」

丸井「イガラシ、どうしたってんだ…。」

イガラシ「はあ。」

丸井「いくら相手が江東だからって、こういうばあいは確実にバントでセカンドにおくるべきじゃないのかよ。」

「カーン」

「やったーっ」

丸井がイガラシをつかまえて話をしていたが、加藤は初球を引っぱりライト前にクリーンヒットを打った。一塁ランナーは三塁まで進塁した。

丸井「ランナー一塁、三塁か。ま…ヒットででたんじゃ文句もいえめえ。へへ…スクイズでまず一点いただきだな。イガラシ、サインをたのむぞ。」

イガラシ「キャプテン、今日のところはこまかいこといわないで一発大きいのかましてやったら。」

丸井「タ、タイム…。おいイガラシ、いったいどうしたっていうんだ！ さっきの近藤の三者三球三振といい、どういうつもりなんだ。てめえすこし江東中をなめすぎてるんじゃないのか。」

イガラシ「いや…そういうつもりじゃないんですがね。おれたちの試合ぶりを青葉に見られてるんですよ。」

丸井「それがどうしたってんだ。いいところをみせてやろうじゃないか。」

イガラシ「それがバカ正直ってんですよ！」

丸井「バ、バカ？」

イガラシ「さっきも新聞社の人がいつてたでしよ、青葉の一軍は報道陣をシャットアウトまでして猛練習をしてるってのに、なにもおれたちのプレイぶりをすっかりさらけ出すこともないでしょう。」

島田「そういや、そうだな。やつらには二軍がいるからいいようなもののこっちにはいねえからな。」

丸井「だけどなんだい。さらけだすの、ださないのでスパイごっこじゃあるめえし。おれはきらいだねそういうの。」

イガラシ「おれだってすきでやってるわけじゃないですよ。しかしあいてがあいてだし、そんなきどつてられる場合じゃないんですよ。だいたい勝負つてものにすききらいをはさむものでもないでしょうに。」

丸井はイガラシの作戦をなかばあきれて聞いていた。

イガラシ「いいですかキャプテン。われわれには日本一になるって目標がありましたよね。それに……。」

丸井「わかったよ！ 打ちゃいいんだろ、その陰険いんけんな野球つてのをやってやろうじゃねえか。」

丸井は初球の高めのボール球をおもいきりスイングした。しかし丸井は空振りしバランスをくずしてたおれこんでしまう。

イガラシ「キャプテン、いまのは完全にボールですよ！」

丸井は二球目もおもいきりスイングした。快音を残して打球はライトの金網をこえていった。「やったーっ、スリーランホームランだ！」

イガラシ「すごい、あたりでしたね。」
丸井「フンだ。」

「かっとばせーっ、かっとばせーっ、いーがーらーしー。」
墨谷二中は結局一回の裏六点をあげた。

4・5 墨谷快進撃

中村 「しかしハデに打ったね！」

青葉捕手 「まったく……」

二軍投手 「でも、こんなにあらっばいチームだったら、おれたち二軍でも勝てるんじゃないかねえか。」

二軍三塁 「うむ……」

二軍投手 「ねえ先輩、地区予選はなにも先輩たちの手をわずらわすこともないと思うんですが。」

佐野 「てめえら、そろいもそろってどこみてるんだ。」

二軍投手 「は……はあ。」

佐野 「やつらは、おれたちに手のうちをみられねえようにしてこれだけ一方的な試合をしてんだぞ。目のタマかっぼじってよく、みとけ！」

二軍三塁 「は……はい。」

この回も、近藤はさえわたった。近藤の投げるタマはことごとくキャッチャー小室のミットに吸い込まれていった。

二回の裏の墨谷二中の攻撃は目をみはるものがあつた。完全に相手投手のボールをみきわめ、バッターボックスに立つバッターは相手投手のタマをことごとくジャストミートした。みかね

た主審がホームベース上で塁審を集めた。

主審「どうだろう、これいじょうつづけてもしようがないんだと思うんだが…。」
塁審「まあ、むだでしようね。」

ホームベース上で審判団が協議を開始した。

主審「どうかね、きみ。まだつづける気はあるかね？」

江東捕手「い…いえ結構です。」

主審「じゃあ、全員整列させて。」

江東捕手「は…はい。」

突然に整列の合図がかかった。

島田「どうしたってんだ？」

高木「まだ二回のそれも途中だったのによ。」

「16対0で墨谷二中のコールド勝ちとする！」

4・6 青葉部長の決意

墨谷二中の試合が終わると同時に青葉部長が立ちあがった。

青葉部長「さあ、いくぞ。」

青葉一軍「は…はいっ。」

青葉ナインは墨谷の予想以上の力におどろきをかくせなかった。

佐野「しかし、手のうちをみせないで二回コールドとはすごいですね。」

青葉部長「そのやつらがわれわれにまともにぶつかってくるわけだ……。しかしおもったいじように力をつけたもんだ。」

青葉部長は球場通路で顔なじみの新聞記者に呼び止められた。

記者A「部長さん、しばらくです。」

青葉部長「やあ。」

記者A「どうでした墨谷を観戦した感想は？」

青葉部長「感想といわれても、まともに戦ってない墨谷をどうこういえんよ。」

記者A「そういえば、そんな試合ぶりでしたね。」

青葉部長「ただ、きょうの試合から察すると昨年よりも力をつけたことはたしかだ。」

記者A「ほほう。ということは、昨年おたくをやぶったときの墨谷より強くなってるということですか！」

青葉部長「そうでもなけりや、この青葉が予選ごときにめくじらたてて特訓などせんよ。」

記者A「な…なるほど。」

青葉部長「まあ墨谷にしろうちにしろ、どっちが勝ったにせよ、全国大会の優勝のカギをにぎるといっていいだろう。」

記者A「ゆ…優勝のカギ…。す、すると青葉としては墨谷との予選が事実上の日本一をきめる試合とみてるわけですね。」

青葉部長「うむ…そういうことになるな。ただし、負けやせん！ 昨年のこの大会で青葉に唯一の黒星をつけてくれた名譽のばんかいのためにもな！」

青葉部長は顔なじみの記者の質問に墨谷二中に対するなみなみならぬ決意をあらわにするとともに、打倒墨谷二中を強く思うのであった。

そして全国中学野球地区予選大会の日程はすすんでいった。青葉は名門の名のとおりに二軍で勝ちすすんでいった。一方三十六校の強豪との練習試合に全勝した墨谷も、四戦五戦と戦いぬいてきたチームを苦もなくほうむり、破竹のいきおいで勝ちすすんでいった。そして地区予選ながら墨谷二中と名門青葉学院とのあいだで、事実上の日本一をかけた決戦をむかえたのであった。

第5章 夏の地区大会決勝戦

とうとう地区予選大会決勝の日をむかえた。決勝は二年連続で墨谷二中对青葉学院の対戦となった。

5・1 選手控え室で…

丸井「試合まえてのはなんと経験しても緊張しちゃうもんだな。」

高木「そうですね。」

丸井「おい、着がえたら腹ごしらえしようぜ。」

高木「はいっ。」

食事が始まったが、丸井がいつも大食いの近藤がやけに小さな弁当箱で食べているのに気がついた。

丸井「近藤！ おおぐらいのおまえがそんなかわいい弁当でまにあうのかよ？」

近藤「試合まえやから、かるうにしとぎってママにいわれたんや。」

丸井「ママ？」

「ブーツ」

ナイン一斉に腹をかかえて笑いだした。

丸井「あの顔でママだと。」

近藤「ママをママいうて、なにがおかしいんやねん…？」

島田「くるひいっつ。」

イガラシ「よしなさいよ。あまりからかうと試合に影響しますよ。」

丸井「あ…すまん、すまん。いや…そこまで気をくぼるなんて、たいへんいい心がけた！ ん。」

みんな横目で近藤を見て笑いをこらえていた。

イガラシ「ブーツ！」

近藤「イ…、イガラシさんまで…。」

丸井「このやろーっ、人のこといつときながら。」

わきあいあいで食事をしているところに青葉部長を先頭に青葉ナインが入ってきた。

丸井「や…どうも、しばらく。」

青葉部長「なかなか楽しそうな昼食じゃないか。ほほーっ、めざしか、おいしそうだね。」

丸井「あ…気がつきませんで。おひとつどうぞ。」

青葉部長 「いや…、いますませてきたばかりなんでね。」

丸井 「あ…そう。」

青葉部長 「おいしいからって、試合まえだしほどほどにね。」

丸井 「それもそうだな。このへんでやめとくか。しかし、あいてのチームまで注意するなんて、さすが余裕あんね！ みんなほどほどにしとこうぜ。」

イガラシ 「そうスね。」

青葉学院は更衣室のおくから墨谷二中を横目で見ながら着がえを始めた。

佐野 「しかし、昨年の墨谷にくらべるといやにおちついていきますね。」

青葉部長 「うむ…、かえっておまえたちのほうが緊張しているぐらいだ。」

佐野 「やっぱり、昨年、今年と大試合にでますからなれてきたんですかね。」

青葉部長 「いや…そうじゃあるまい。」

佐野 「そうじゃないといいますと…？」

青葉部長 「自信だよ、自信。あれはどうみたってうちに負けるとはおもっていない顔つきだな。まあその余裕もいまのうちだろうが…。」

青葉部長は墨谷の食事風景から墨谷の自信を読みとったが、春の全国選抜大会を制した青葉もまた墨谷には負けない自信を持っていた。

5・2 試合開始

試合まえのあいさつが終わって、墨谷ナインは守備位置についた。墨谷二中のピッチャーは近藤。試合前のウォーミングアップの投球練習をはじめていた。

佐野 「あれで、さわぐほどのタマかね。」

青葉捕手 「まったく。」

佐野 「一番、ちよつとおどろかせてやれ。」

中村 「まかせといて。」

「プレイボール」

球審の合図で試合がはじまった。近藤の初球はストライク。墨谷応援団から歓声が上がった。

「ナイスピッチ」

「いいぞ近藤！」

近藤 「すごい歓声やなあ！ しびれるーっ。」

決勝戦ということもあつて盛り上がる球場に近藤はやや戸惑いながらも二球目を投じた。

「ストライクツー」

近藤 「こいつでどうやっ。」

「カーン」

近藤の三球目先頭打者レフト中村はライト前にヒットを打った。こんどは青葉応援団から歓声が上がった。

「やったーっ」

青葉部長 「ようし、それでいい、それでいい。さあ二番もつづけー！」

藤田「はいっ。」

「タイム！」

丸井がタイムを取ってマウンドに向かった。

丸井「なあ近藤。まさか三球ともどまん中に投げたんじゃあるめえな。」

近藤「い…いえ、その…えーと…」

丸井「おれはおめえの後ろにいるんだ。なにもかもわかってるんだぞ。」

近藤「す…すんまへん。ス…ストライクがはいると観衆がワーツとわくもんやから…。」

丸井「で…それにこたえてやろうと投げたわけか。」

近藤「ハハ…そうなんス。」

丸井「バロー、てめえはプロ野球のスターじゃねえんだぞ。まわりなんか気にしねえで、ちゃんとコーナーについて投げるんだ。」

近藤「はい。」

近藤は気を取り直し、コーナーに投げることに気をつけて二番バッター藤田に向かって投じた。藤田は近藤の投げた二球目をおもいきりバットを振った。

「カーン」

快音を残して打球はレフトスタンドに向かってとんでいった。レフト久保が追いかけるも、打球ははるか上を越えてスタンドに吸い込まれていった。ツーランホームランとなって、青葉学院が先制した。

マウンドに墨谷内野陣が集まった。

丸井「おいおい、気をおとすのははやすぎるぞ。まだ負けたわけじゃあるまいし。」
イガラシ「どうしたんだよ、近藤らしくもない!」

近藤「だってコースをついたワイのタマが打たれたとおもうと:。」

丸井「このやろう、のぼせあがるのもほどほどにしやがれ。いまおまえが投げているあいでは青葉なんだ、青葉!」

イガラシ「まあ、まあ。なあ近藤、いま打たれたタマはすこし内側にはいつてたんじゃねえのか?」

近藤「そ:そ:ういわれると、ほんのちよつと。」

イガラシ「そのほんのちよつとのわずかなミスをみのがさないのが青葉なんだよ。ようするにやつらを打ちとるのには速球だけじゃなく、コースをつく正確さが必要なんだ。」

近藤「は:はあ。」

イガラシ「おまえのコントロールならできるはずだ。やってみろ。」

近藤「は:はい。」

近藤は三番打者をなんとかサードゴロに打ちとつた。

イガラシ「近藤、まだコースがあまいぞつ!」

近藤「は:はあ。」

近藤はコースに気をつけて四番打者に向かって投げた。

「ストライク」

丸井「いいぞ近藤!」

イガラシ「その調子だ。」

内野陣が近藤に声をかけた。近藤は二球目をバッターに投げ込んだ。

「カキーン」

セカンド後方に上がる小フライとなりセカンド丸井が後ろ向きで捕球した。しかし近藤はなぜ今のボールが打たれたのかよくわからないでいた。

イガラシ「どうかしたのか、近藤。」

近藤「いまのバッターいうたらコースをバッチリついたので打ちはるもんで。」
イガラシ「な…なんでえ、あいてが青葉の四番ならあたりまえだ。」

五番はショート中野。ツーストライクからの三球目を打ってキャッチャーフライとなった。ようやくチェンジとなり青葉学院の一回表の攻撃が終わった。墨谷ナインがベンチに戻っていく。

丸井「どうしたんだよ、近藤。」

近藤「だって、ひとりも三…、いや…なんでもないねん。ハハハ…。」

丸井に怒られるのを察知して近藤は言葉を濁してベンチに戻った。

近藤「しかし一イニングでひとりも三振にできなかったのはうまれてはじめてや。
青葉ってやーらしいチームやなあ。」

近藤は青葉ベンチを見ながら青葉学院の強さを感じていた。

一方青葉学院ベンチでは…

5・3 青葉の動揺

青葉二塁「あのやろう、おもったよりたちなおりがはやかったな。」
青葉捕手「む。しかしあのぐらいやってもらわなくちゃ試合がだらけちゃうぜ。」
佐野「まあなんにしても二点いれてもらえりゃたくさんだ。」
青葉捕手「それもそうだな、佐野から打てっこねえからな。」
佐野「さあ、いこう。」

青葉のエース佐野が投球練習をはじめた。

島田「昨年よりいちだんとはやいな。」
加藤「う…うむ。」

墨谷二中先頭バッターはショート高木。太いバットを短く持って打席に入った。

加藤「あせるな、あせるな。」
丸井「じっくり打っていこうよ!」

ベンチから先頭バッター高木に向かって声がとんだ。

佐野「余裕あるふりをしやがって、おれのこのタマをさわれるものならさわってみろ。」

「カーン」

高木は佐野の三球目をセンター前にはじき返した。

青葉部長「そ…そんなバカな。あの佐野のタマが打たれるなんて…」

青葉ベンチは動揺した。

丸井「さあなにもえんりよすることあねえガンガン打っていこうぜ。」

加藤「オウッ！」

二番ファースト加藤は佐野の初球を引っぱりライト前に運んだ。

三番丸井もヒットを打った。四番イガラシも、そして五番小室、六番島田となると佐野に対して六連続ヒットを打った。三点はいって3対2と逆転し、まだノーアウト満塁のチャンスが続いた。

たまらず青葉ベンチから「タイム！」の声がかかり、青葉部長がバッテリーを呼び寄せた。

青葉部長「おまえら気はたしかなのか？」

佐野「は…はあ？」

青葉部長「やつらがバットをみじかくもってるのはなんのためだ？」

青葉捕手「佐野の速球についてくるためだと思います。」

青葉部長「だったら長くもたせるようにしてやればいいだろう。」

青葉捕手「は…はあ…？」

青葉部長「外角低めいっばいについてな！」

佐野「なるほど。」

青葉捕手「ああバットをみじかくもつてりゃ外角は手がでませんからね。」

青葉部長「やっと冷静になってきたな！ 連打されたぐらいで動転しちゃだめだぞ。」

佐野「す…すいません。」

青葉部長「さあ、いってこい！」

「プレイボール」

丸井「さあバッター、えんりょなくいこうぜっ。」
久保「よしきた。」

七番久保は初球外角低めのボールを空振りしたが、二球目うまくおっつけてライトに運んだ。もう少しで抜けるかという当たりだったが、青葉右翼がこのタマを捕球しサードランナーイガラシがタッチアップして得点を加えた。

「タイム！」

青葉部長がもう一度バッテリーをベンチに呼んだ。

丸井「へへ：青葉にタイムがおおくなってきたぞ。」
加藤「まさか、こう苦戦するとはおもわなかったんだらうよ。」

青葉部長「これじゃ手のうちようがないな。いまや佐野でおさえられるようなチームじゃなさそうだ。こうなったらバックにまかせるんだ。やつらにへたなさいくは通用せんからな。」

佐野「わかりました。」

青葉部長「さあ、気をぬくなよ！」

青葉捕手「はいっ。」

ワンアウトで、一塁三塁。青葉のピンチは続いた。

続く八番遠藤は佐野の初球をジャストミートするがおしくもファールとなった。二球目ライトの頭上をぬくかというあたりだったが青葉右翼がナイスキャッチ。一塁ランナー島田がとびだしていたためダブルプレーとなった。

一回の攻防を終わって墨谷二中が4対2と青葉学院をリードした。

5・4 近藤の自信

この回の青葉学院の攻撃は六番からであった。トップバッターが近藤のタマを右中間にはこんだ。そして次の七番バッターがすかさずバントした。サードイガラシがすばやく前進してファーストに送球した。

「アウト！」

近藤「ハレ…、あないすばやくバントを処理したのに…セカンドでころせないなんて…。」

イガラシ「青葉ってのはあれぐらいの足はザラなんだよ。かきまわされないようにしろよ。」

近藤「は、はあ。」

ワンアウト二塁。次の青葉八番バッターはサード横を抜けるかというあたりだったがいガラシがこれを横っ飛びでとった、しかしどこにもなげられずワンアウト一塁三塁とピンチがひろがった。

丸井「どうした、近藤？」

近藤「こう打たれっぱなしやとワイかて自信なくなってしまうがな…。」

丸井「なにも自信なくすこたあねえんだよ。そもそもおまえだけでおさえられるあいてじゃないんだから。元気だして投げんだぞ。」

丸井はセカンドからマウンドに行って近藤に声をかけるとまたセカンドに戻っていった。

近藤「よけい自信なくすことをいうんやから、もう…。」

バッターボックスにはピッチャーなので九番にいるが、強打者佐野が入った。近藤は試合前にこのバッターは一発があるから注意するようにイガラシから忠告を受けたことを思い出していた。

近藤「ええい、どうにでもなれ。」

自分のタマがことごとく青葉にミートされるので自信がなくなっていた近藤だったが、とにかく自分のピッチングを一所懸命にやることだけを考えて投げ込んだ。

「カキン！」

左打者佐野は近藤のタマをうまくおっつけてレフト方向に流し打った。サードイガラシが頭上を抜けるかという打球をタイミングよくジャンプしこれを捕った。走ろうとしていたサードランナーがベースに返ろうとしたその時、ショート高木がサードベースにカバーにすばやく入りイガラシからのタマを捕球した。

ダブルプレーとなり、この回墨谷は青葉の攻撃を0点におさえた。まだ二回を終わったばかりだというのに、肩で呼吸をしてベンチに戻ろうとしている近藤にイガラシが声をかけた。

近藤 「はあ…、はあ…。」

イガラシ 「どうだ、つかれたろ。」

近藤 「つかれたもなにも、もうひと試合投げたみたいや。」

イガラシ 「青葉が相手じゃむりもねえさ。でもがんばるんだぞ、あの佐野にしたって同じなんだから。」

近藤 「はあ。」

そして回はすすんだ。青葉はたたみこむような墨谷の猛打線をあい
てに、佐野のたくみなピッチングと、目のさめるような好プレイでか
ろうじて追加点をゆるさなかった。いっぽう墨谷も近藤のけんめいな
ピッチングとナインのみごとなプレイでおなじく得点をゆるさなかった。
のほなせぬすさまじい試合展開で九回をむかえたのであった。そして一進一退の目

5・5 ピッチャーイガラシ

九回の表、得点は4対2で墨谷二中がリードしていた。そして青葉学院の最後の攻撃をむか
えた。

佐野 「あいかわらずはやいタマですね。」

青葉部長 「しかし、おまえらなら打ちくずせるピッチャーのはずだ。絶対にウチが勝
てるはずなんだ。」



「カキーン」

この回先頭の二番打者藤田がライトに二塁打を打った。

イガラシ 「どうした、近藤！」

近藤 「どうしたって…？」

イガラシ 「いまのタマまるで球威がなかったじゃねえか。」

近藤 「あ…い、いまのちよっとすつぽぬけてしもたんや。」

イガラシ 「まあいいだろ、どうせ二点リードしてんだ。一点やるつもりで投げろ。」

青葉部長 「よしよし、これでばんかいのおぜんだてがそろったようだな。」

近藤には余裕がなくなっていた。ランナーがいることを忘れて、セットポジションをとらずに次の打者に投げこんでしまった。セカンドのランナー藤田はらくらく三塁に進んだ。

丸井 「バ…バカヤロ。どうしたんだ！」

近藤 「あ…ランナーわすれた。」

丸井 「すっかりしろよ、おい。」

青葉部長 「さて、たたみこめる足がかりができたぞ。」

ランナーが三塁に進んだこともあって近藤は大きく振りかぶって投げようとしていた。それを見たサードランナーはスタートをきった。サードイガラシも…。バッターはあらかじめ決められていたようなサインプレーでバントした。しかしこのタマがピッチャー前に上がる小フライとなってしまった。あわててサードランナーがベースに戻った。

近藤「オーライ、オーライ」

近藤がこのフライをとろうとするが、落ちてくるタマの前で転んでしまった。イガラシがわざわざバックアップした。

丸井「な…なにやってんだ近藤！」

近藤「すいまへん、ちよつと足がもつれてしもて…。」

丸井「イガラシおまえがしめくくつてくれよ。」

イガラシ「はい。」

近藤「そ…そんなせつかくここまで投げたんや、さいごまで投げさせてえな。」

丸井「だめだ、だめだ。投げさせてやりたいのはやまやまだが、ここでまたヘマがでりや逆転されちまうからな。」

近藤「そんな殺^せ生^{しょう}な、もう絶対にヘマせえへんから。」

丸井「しつこいな、おまえは。だいたいその息づかいはなんだ。つかれきっているじゃねえか。」

肩で呼吸をしている近藤を丸井が指摘したとたん、近藤は突然にシャキッとした。

丸井「どうする、イガラシ。」

イガラシ「二点リードしてることだし、もうすこしようすをみてやったらどうでしょう。」

丸井「まあいいだろ！」

近藤「おおきに、おおきに。」

丸井「ただしヘマをしたらすぐ交代だかな。」

近藤「は、どのようにでも。」

丸井は完投したがる近藤を少し見直して、続投を決意した。そして青葉のバッターは四番、近藤の初球をフルスイングした。

「カーン」

打球は快音を残してセンター上段に吸い込まれていった。

丸井「しょうがねえさ、打たれちゃったんだからな。さ、たてよ。」

丸井はマウンドですわりこんでいた近藤の肩に手をかけた。

丸井「イガラシ、ちょ、ちよつとさわってみろ。すぐく熱もってるぞ。」

イガラシ「こゝ近藤！ おまえ肩をさわられていたくないのか！」

近藤「いえゝべつに。」

イガラシ「じゃあ、いたさをとおりこしたんだな。」

近藤「どういえば、三、四回ごろいたかったけどゝ、どうして？」

丸井「いったい、どうしたってんだい。」

イガラシ「ちよつとキャプテン！」

イガラシは近藤に聞こえないようにマウンドから離れたところで丸井と話をした。

丸井「どうかしたのか？」

イガラシ「いぜんおれが青葉戦で肩をぶっこわしたときとおなじなんでね。」

丸井「ええゝ。」

イガラシ「やつのからだではいたみだした三、四回が限界だったんですよ。からだはでかいがなんだってまだ一年生なんですからね。」

丸井「あ…あのバカヤロウなんだってだまってやがったんだ。」

イガラシ「シー、シーッ。いましらせちゃかわいそうですよ。シヨックが強すぎますからね！　またなおっておれみたいに投げられるようになるかもしれないんだから。」

丸井とイガラシは再びマウンドにやってきた。

丸井「さあベンチでやすんでろ。これいじょう点をとられちゃかなわねえからな。」

近藤「べ…、ベンチ？　ワイがピッチャーおるときはライトにはいるんやなかったんですか。」

丸井「バ…バカヤロウ。おまえみたいなヘマはベンチにひっこんでりゃいいんだ。」

近藤「そ…そんなー。」

丸井「はやくひっこまねえかい。」

近藤「あいた。いたいなあ、もうー。」

丸井が近藤のケツをけりあげてはやくベンチに行くように指示した。マウンドにはイガラシが立った。そして投球練習を開始した。

イガラシ「よくみてるんだぞ近藤！　かならず勝って、全国大会行きをきめてやるぞっ。

そこでおまえといっしょに投げるんだ！　優勝するためにな！」

リリーフに立ったイガラシの気迫はすさまじかった。青葉打線はイガラシの投球になすべなくアウトをかさねていった。そして青葉のリードを最小の一点におさえたまま、墨谷二中の最後の攻撃をむかえた。

5・6 佐野降板！

墨谷ナインは最後の攻撃の前にベンチ前で円陣を組み、キャプテン丸井の注意を聞いていた。

丸井「さあなんとしてもばんかいしてやるんだ。ここで負けたらおれたちの全国

大会優勝の夢も水のあわになっちゃうんだからな。いけつ、一番バッター！」

島田「キャプテンからですよ。」

丸井「あ……。」

小室「あんなにこうふんしちやっただいじょうぶかな。」

ピッチャー佐野が丸井に対して投じたタマはストライク。しかし丸井は佐野の投げたタマに球威がないことを感じとった。丸井がマウンドの佐野をみると、佐野は肩で大きく息をして疲れを隠せないでいた。佐野の投げた二球目、丸井は強振した。しかし力んだためバットに当たりそこねてファーストゴロとなってしまった。

丸井「し……しまった。」

ファーストが前進してこのボールを取って、ベースカバーに入った佐野に投げようとしたその時だった。佐野が倒れ込んでしまったのである。

「タイム！」

青葉からタイムの声がかかり、青葉部長が佐野のもとにむかった。



青葉部長「さ…佐野！ 佐野！」

佐野「あ、す…すみません。」

青葉部長「ピッチャー交代！」

佐野「ま…まっくてください部長！ ぼくまだ投げられます。」

青葉部長「いいんだ、いいんだ、よくやった。さあベンチにかえって休むんだ。」

佐野「ぶ…部長、おねがいです。あとひとり…いや…一球だけでも投げさせてください。」

青葉部長「バカなことをいうな、ここでムリをすればどうなるかおまえ自身がいちばんよくしってるはずだ！」

佐野「し…しかし部長…。」

青葉学院のエースでもあり、キャプテンでもある佐野は必死で続投を志願したが、再び倒れ込んでしまった。

青葉部長「さ…佐野！ タ…タンカだ。タンカをもってくるんだ！」

佐野はベンチに下がり、変わりにピッチャーには次期エース候補とされている大橋がマウンドに立って投球練習をはじめた。

高木「けっこう、はやいな。」

加藤「さすが青葉のリリーフとなるとちがうぜ。たのむぞイガラシ！」

イガラシ「よしきた。」

「カーン！」

イガラシはリリーフ大橋の二球目を打った。イガラシの打球は右中間をやぶる二塁打となった。ノーアウト二塁三塁。

五番小室がバッターボックスに入った。ここで墨谷二中は初球をスクイズをした。しかしスクイズしたタマは三塁線をわずかにこえ、ファールボールとなってしまった。

「タイム！」

青葉学院の部長が内野陣をベンチ前に集めた。

青葉部長 「いったいどうしたんだというんだ、おまえたちは。スクイズをけいかいして一球はずせといったサインがみえなかったのか。」

青葉捕手 「あ、う……うっかりしてました。」

青葉部長 「いいか、こういうときこそおちつくんだ、こういうときこそな。」

青葉捕手 「は……はい。」

小室は次のタマをスクイズのかまえからヒッティングした。打球はレフトフライとなり三塁ランナー丸井がタッチアップした。青葉レフトがとったタマをバックホームした。

「セーフ！」

「同点だあーっ！」

レフトが直接バックホームしたためセカンドイガラシは三塁に進塁した。六番島田は三塁線を強襲するライナーを打つが、青葉サードもこれをダイレクトでキャッチした。サードイガラシがとびだしていたためダブルプレイとなった。

高木「くそつ、あと一步つてところで勝ったのに。」
丸井「ようし、こうなったら延長でもぎとるしかねえな。がつちりいこうぜ」

延長にはいつてイガラシはたくみなピッチングで青葉の猛打線にたちむかった。ナインたちもそれにこたえるようによく守り、青葉に得点をゆるさなかった。いっぽう青葉も火を吹くような墨谷打線を好リリーフと完ぺきな守備と、それに選手層のあつい利をいかし、意表をつくたくみなリリーフの交代でやはり墨谷に得点をゆるさなかったのであった。

5・7 すて身の青葉

回をおうごとに墨谷は選手層のうすさをかくせなかった。ついにはだれの目にもその変化がわかるようになったのであった。そして回は十七回にはいった。

この回の青葉学院の先頭打者ショート中野は右中間を破るツーベースヒットを打った。

青葉捕手「ようし、ついにノーアウトでランナーが得点圏にはいったぞ。」

中村「そろそろ勝負をつけなくちゃあな。」

青葉部長「なにをのんきなことをいっとるんだきさまら！ もうとつくに勝負がついてあたりまえなんだぞ。それをぐずぐずしおつて。ピッチャーのイガラシをみろ！ ただつたつてただけだつてのに。さ、こんどこそこのチャンスをものにするんだぞ。」

青葉左翼「は…はいつ。ようし…。」

イガラシの疲労はとくにピークを越えていた。それでもイガラシは投げ続けた。

イガラシ 「あっ。」

青葉左翼 「おーいて。」

イガラシ 「す…すみません。」

イガラシの投げたタマは打者の背中を直撃するデッドボールとなってしまった。

丸井 「タイム！ だいじょうぶかよ、イガラシ。」

イガラシ 「へへ…ちよっと手がすべっちゃって。」

丸井 「こうなったら、バックにまかせて打たせていけよ。」

イガラシ 「ええ…でもバックだったってあれでだいじょうぶなんすかね？」

丸井 「あれでも、おめえよりはましだ。」

イガラシ 「そうすかね、へへ…。」

丸井 「ま…なんにしてもがんばれや。」

イガラシ 「はい。」

「プレイボール！」

続く青葉学院のバッターはイガラシのタマをセンターに運んだ。センター遠藤が前進してきてダイレクトで取ろうとしたが、足がもつれて転倒してしまった。ライト島田がバックアップした。セカンドランナーの中野はこれを見て、サードベースをまわり一気にホームに突っ込んだ。島田の投げたタマをイガラシがカットし、キャッチャー小室に投げ込んだ。ホームベース上でのクロスプレーとなり、中野と小室がぶつかりあってかろうじてアウトになった。しかし中野が立ち上がれない。

主審「ちよつとだれか。」

青葉部長「ど…どうした。」

主審「肩をはずしたようですね。」

青葉部長「タンカもってこいっ。」

青葉部長の指示で青葉ベンチからタンカが運ばれた。

中野「いたたたた…。」

青葉部長「そ…そうっとはこべ。」

中野は青葉ベンチに寝かされた。

青葉捕手「部長、こう負傷者がでちゃ、この試合に勝ってもかんじんの全国大会でだいじょうぶでしようかね。」

青葉部長「おまえたち、ほんとうにそんな心配してんのか。」

中村「は、はあ…。」

青葉部長「あんなくたびれた墨谷からどうりで得点できないはずだ。なあおまえたち、墨谷のキャッチャーのスパイクだらけの傷をしろ！ それにピッチャーのイガラシもだ！そして内野も外野もだ！」

青葉ナインが見た墨谷ナインは疲弊^{ひへい}しきっていた。

青葉部長「どうだ、やつらのすがたは？ たとえこの試合に勝ったとしてもあれじゃすでに全国大会出場は不可能なボロボロなチームになってしまってるじゃないか。やつらだってそんなことはしったうえで戦っているはずだ。いまやあとの中からどうなろうとこの試合だけは負けまいとな。いいか、よくきけ！

おまえたちが全国大会のためなんてからだをかばって試合をしてるいじょう、
ああすて身になった墨谷には絶対に勝てるわけがないんだぞ。たとえこっち
がボロボロになろうとどうなろうと、こっちもすて身で戦ってこい。」

「は…はいっ！」

青葉部長「さあ、いけ！」

ワンアウト一塁、三塁。イガラシは渾身の力を振りしぼって投げた。

「カキーン」

打球はショートゴロとなった。ショート高木から丸井、そして加藤とボールがわたりダブル
プレーとなって青葉の攻撃を断ちきった。

青葉部長「ま…またやられた。」

そして、同点のままついに十八回をむかえたのであった。

5・8 死闘！ 十八回

回は十八回。イガラシが投球練習をはじめた。投げるボールには勢いはなく、ただ小室のミツ
トめがけてかろうじて投げ込んでいた。

青葉部長「みろ、あのタマを…。そろいもそろってあんなピッチャーから得点ができんとはな。」

青葉ナインは誰も口をきくものはいなかった。

青葉部長「くやしかったら青葉のメンツにかけて点をもぎとってきたらそうなんだっ！

青葉の底力でたたきつぶしてきたらどうなんだっ。えー！」

青葉捕手「は…はいっ。」

イガラシが投じた初球はストライク。しかしそのタマにはやはり球威はなかった。バッターは二球目をねらいすましたようにバットを振った。しかしイガラシの投げたタマはカーブ、タイミングがあわずバットは空をきった。

「ストライクツー！」

青葉捕手「な…なんだい、まだ変化球をなげられるのかよ。」

中村「しぶといやろうだぜ…。」

三球目、イガラシは渾身の力でインコースに速球を投げ込んだ。

「ストライク、バッターアウト！」

青葉部長「なんなんだ、あいつは…。」

三球目のイガラシの速球を見て青葉部長は驚きの声をあげた。

ワンアウトとなったが、打順よく一番バッター中村が打席に立った。中村はイガラシの初球をフルスイングした。

「カキーン」

打球は快音を残してライト島田の頭上をおそった。島田が全力で背走した。最後、島田はジャンプしてフェンスにぶつかりながらもこのタマを好捕した。

「がんばれよーっ」「ツーアウトだぞー」「あとひとりだぞー」

応援席から墨谷ナインを応援する声が墨谷ナインに届いた。

ツーアウトとなった。次の打者は初球をファーストゴロにしてしまう。ファースト加藤が前進してきて、ベースカバーに入ったイガラシに送球した。その時だった。カバーに入ったイガラシの足がもつれて打ったバッターと激突してしまったのであった。

丸井「イガラシ！ どうしたイガラシ！」

イガラシ「だ…だいじょうぶ。は…走って…いきが…」

加藤「いま肩を打ったようだけど…なんともないか？」

イガラシ「そんなに…かんたんにいかれる肩、してないよ。へへ…、そんなことよりはやいとこ終わらしちゃいましょうや…」

もう限界をとうに超えているイガラシだったが、最後まで意地を張り通した。イガラシがマウンドに向かっていている時だった。外野線審の声が響いた。

「タイム！」

外野線審は倒れ込んでしまったライトを守る島田に声をかけた。

球審「きみ、どうした。」

島田「あ…。いけね、ちよつとめまいがするなとおもったら…。」

球審「さっき、頭を打ったからじゃないのかね？」

島田「い…いや、ぼくこんなことしよつちゅうなんすから。な…なあ。」

遠藤「そ…そうよくやるんですよ。」

高木「うん…。」

球審「もう交代する選手がいなかった、あまりムリしないようにね。」

島田「はい。」

丸井「ほんとうに、だいじょうぶなんだろうな。」

島田「だ…だいじょうぶですよ。」

丸井「どうせあとひとりなんだから、おまえはつつたつてりゃいいからな。」

島田「はい。」

先ほどフェンスに激突した痛みと合わせて、身体の疲労は島田も限界を超えていた。

青葉部長「さ、ねらいはわかっとるな！」

青葉三塁「はい。」

青葉部長はライトを見ながら次のバッターに指示をした。

バッターボックスに立ったバッターは左足を大きく前に出し、あきらかなライトねらいのバツティングフォームでかまえた。イガラシはこれに気づいてインコースをねらって投げたが、そのタマには勢いがなく、コースも甘く入ってきた。

「カキーン」

快音を残してボールはライトをおそった。島田は最後の力を振りしぼりこのタマをおう。最後は後ろ向きに出したグラブに打球が入った。

「スリーアウト、チェンジ」

センター遠藤が島田のもとにかけよった。

遠藤「よくやったぞ島田。さ、つかまるんだ。」

島田に肩をかした遠藤だったが途中で二人ともころんでしまった。マウンド上ではイガラシが精も根も尽き果てたのかのようにしやがみこんでしまった。

丸井「ほら、たたねえか！　こんなときこそ強がってみせるもんだ。」

「よくやったぞー、墨谷ー。」

応援席からも健闘をたたえる大きな声が降りそそがれた。ナイン全員ベンチに戻ると倒れるように横になった。そう猛暑と十八回という長い戦いに精も根も尽き果ててしまったのであった。

丸井「すまんみんな…ほんとうによくやってくれた。ありがとう！　おれたち…

青葉に勝つことができなくても、負けなかったんだからな！」

島田「キヤ、キャプテン…まだおれたちの攻撃がのこってるんですよ！」

高木「そ…そうとも。」

丸井「いいんだよ、もう強がりはいうな。どいつもこいつも、バットをふる力どころかつたてることすらやつとだっていうのによ！」

あまりにもインターバルが長かったため球審が墨谷ベンチにまでかけよってきた。

球審「バッターはどうしたのかね？」

加藤「あ…おれだ。」

丸井「さあおきろ！ バッターボックスにたつてりゃいいんだからな。」

加藤「は…はい。」

丸井「休ませてやりてえのはやまやまだが、棄権だけはしたくねえからな。」

加藤「わ…わかってます。」

自分の打席ということも忘れて横になっていた加藤だったが、起きあがってバッターボックスに向かった。加藤も疲れていた。簡単にツーストライクに追いこまれたが、三球目をフルスイングした。しかしバットは空を切った。

「ストライクバッターアウト！」

加藤は最後の力をふりしぼってスイングしたためその場に倒れこんでしまった。

球審「きみ、だいじょうぶかね。」

加藤「す…すみません。」

丸井「バカヤローッ。つたつてりゃいいのをムリしやがって！」

丸井の肩を借りながら加藤はベンチに戻っていった。

「いいぞ加藤！」「よくやったぞ！」

応援席からは加藤をほめたたえる声があがった。

丸井「さあ、もうねていいんだからな。さあつぎいってこい！」

加藤をベンチに寝かせた丸井は次打者に声をかけたつもりだったが、次は自分の打席だった。丸井は必死だった。今までの自分を振り返りながら、最後の打席に集中した。初球を空振りした。思わずバランスをくずして倒れ込んでしまった。キャプテンとしてみんなのために自分ができることはなんなのか探っていた。青葉のピッチャーが二球目を投げた。

「カキッ！」

ジャストミートこそしなかったが打球は三塁とショートの間にこがった。ショートが懸命にグラブをのぼすが、打球はそのグラブをはじいてレフト前にこがった。打った丸井は精一杯走った。青葉レフトがまともに走れない丸井を見てファーストにボールを返球した。

「セ：セーフ」

「いいぞ丸井ーっ！」

墨谷応援席からは声が飛んだ。

島田「イ…、イガラシ、おまえだぞ。」

イガラシ「つったつてりゃいいっていったくせに…。こくなキャプテンだぜ…。」

イガラシは一度もバットを振らずに打席に立った。ファーストベース上でリードを取ることができない丸井をみてイガラシは決意した。「こうなったら、一発にかけるしかない。キャプテンを…走らせるか歩かせるかのな！」イガラシは長打をねらって大振りした。

「チッ」

「ファール」

ボールはバットをかすめてバックネットに当たった。イガラシは倒れこんでしまった。息をきらせながら立ちあがった。

二球目…

インコースにきた速球をイガラシはフルスイングした。

「カーン」

打球は快音を残してレフトにアがった。青葉レフトがバックしてこの打球を追ったが、打球は大きい弧をえがいてレフトスタンドにすいこまれていった。

丸井「や…やりやがった。」

イガラシ「へ…、ほんとに…はいっちゃまったぜ。」

打ったイガラシはファーストに向かって歩きはじめたが、すぐに倒れこんでしまった。

青葉部長「ボサツとみてないで手をかしてやらんか！」

青葉捕手「お、おい、しっかりしろ。さあおれの肩につかまれ。」

イガラシ「す…すまねえな。」

丸井が歩きはじめ、そして打ったイガラシもなんとかベースを一周した。墨谷二中応援席から拍手が鳴り響いた。そして青葉学院応援席からも…。

これが丸井にとってキャプテン生活最後の試合になったのである。
この試合で全国大会出場をきめたものの、傷つきすべての戦力を失
い、棄権せざるをえなかったのであった。



付録A 付録

A・1 ちばあきお小論

—人間を見つめる温かいまなざし—

漫画評論家 はせひろとし

漫画が市民権を得た、というような話を聞く。いったいどういう意味なのか。かつて「漫画ばかり読んでいないで、少しは勉強しなさい」と、親から叱責しっせきを受けたものだが、現代の膨大な漫画の前に、親が言葉を失ったのか、漫画で育った世代が親になって、黙認もくねんしている状況なのか。役所がガイドブックなどに漫画をとりいれたとか、ウケをねらったのかお調子もの大学が、入試問題に漫画を用いるまでになった社会現象を言うのか。つまらぬことだ。市民権という意味不明なものを持つまいが、漫画は漫画として厳然げんぜんとあるのだ。かつて小説や映画・演劇で、こんなバカな意見をいう者がいたか。

現代児童漫画の発展が、手塚治虫の工夫に始まったのは誰しも認めるところだろう。ディズニーの影響と考える西洋的な絵柄と、ヒューマニズムをテーマとし、それまでの平面的な構図から、映画的手法を用い立体的な構図をとりいれたことは革命的であった。そして、常に漫画界をリードしつづけたエネルギーは、驚くべきものだ。氏の漫画雑誌を丹念に読み、有望と思える若い漫画家に注目し、ライバル意識を燃やし、第一線に居ようとした執念は、鬼気迫るものがある。おそらく氏の漫画職人のような人は、市民権云々をいつているヒマがあれば、漫画の一頁でも埋めていただろう。

少し脇道にそれるが、加藤芳郎がある週刊誌で、少年漫画（誌）を、汚くて読むに耐えない旨の発言をしていたが、最近の少年漫画がどんなものであるかを検証することなく、ザツと目を通した印象で、氏の知っている漫画との比較の上での、感じを述べただけだろう。氏にとっては、少年漫画は汚いという印象が先立ち、検証などする必要も感じなかったのだと思う。それはそれでいい。であれば、仰々しく週刊誌などで少年漫画のことなどいう必要などなかったのではないか。同じ少年漫画の手塚治虫の作品を、氏はどうとらえたのだろう。やはり汚い漫画というのだろうか。テレビのCMでしか存じ上げぬが、氏の飄々とした人柄と、漫画の面白さは万人に愛されるものだろう。だからこそ、その氏からとは思えぬ発言は残念に思えた。

とまれ、ただ漫画を漫画として、ひたすら描いた職人的漫画家の一人に、ちばあきおがいる。漫画家ちばあきおの誕生は、人気漫画家ちばてつやの弟として育った影響のもとにあったといえ、それは宿命であった。てつや氏の連載が少女漫画で始まったせいも、あきお氏のデビュー

作も少女漫画であった。昭和42年頃で氏が24歳の時である。てつや氏の少女漫画の新しさを感じるのは、当時吉屋信子¹流の少女漫画が多いなか、氏の作品の底流には社会性（リアリズム）があったことである。ここで注目したいのは、一方あきお氏の少女漫画に脈打つものは、人間性（ヒューマニズム）が色濃く反映していることなのだ。大きくとらえると、この差異は、その後の二人の差異として表れる。勿論、ドラマ作りにおいて、社会性人間性というのは切り離せないもので、どちらかの作品に例えば人間性が全く欠如^{けじょ}しているということではない。ちばてつやについては、機会があれば書いてみたい、今はその任ではない。

昭和44年、てつや氏の仕事の比重が少年漫画に移る頃、あきお氏も少女漫画から少年漫画へと移行する。この時期の氏の作品の基調をなすのは、互の価値観の相違からくる自己発見だ。この傾向の作品で、最も完成度が高いのは、昭和47年に発表した『みちくさ』²である。勉強嫌いで、メンコなどで遊んでばかりいる少年と、成績優秀な少年が地下室にとじこめられる。一人は遊びの楽しさを語り一人は勉強の大切さを語るが、このまま助からないという状況を知っ

¹ 吉屋信子（1896年1月12日生）は大正・昭和に活躍した日本の小説家である。新潟県生まれ。栃木県で少女時代を過ごす。栃木高等女学校（現栃木女子高校）卒業後作家を志し、1916年（大正5年）から「少女画報」誌に連載した『花物語』で人気作家となる。その後、大人向けの小説に転じ、1952年には『安宅家の人々』『鬼火』で第四回日本女流文学者賞を受賞。文学界に広く認められる。晩年は「徳川の夫人たち」「女人平家」など女性史を題材とした長編時代小説を執筆した。

² 「別冊少年サンデー」（小学館）1972年（昭和47年）1月号掲載

て、二人の思いは、勉強しておけば良かった、もっと遊んでおけば良かったと、お互いの生活を羨ましく思い、もし助かったら、絶対そうしようという処で氏はもう一転させ、二人が助かる状況を作る。そして二人に、今の決意はどこへやら、外へ出たら思いっきり遊ぶんだ、早く帰って勉強勉強、といわせて終わらせる。二人は元の価値観の世界に戻ることになるが、お互いの自己発見の事件は、おそらく将来二人の生き方に影響するだろう。

昭和42年から45年の4年間、氏は少女漫画少年漫画の短編10数本かいたのち、100頁の長編『校舎うらのイレブン』³を発表する。他の部から、やっかい者扱いされているサッカー部を、新しく赴任してきた若い教師が、一時は彼らの不真面目にみえる練習態度に腹を立てるが、彼らの本心を知り共に練習に励む。地区大会が始まり、前回の優勝校との対戦になる。結果は負けるのだが、これまでにはみられなかった真剣な戦いぶりに、やっかい者扱いしていた他の運動部のみんなも、惜しまぬ拍手を贈るといのがストーリーだ。いっちなまえば、努力が報われるという単純な話なのだが、氏のフリーハンドのあたたかいペンタッチと、人間を洞察するやさしい視点からの人間群像は、単純な話、で片付くほど甘くはない。手塚治虫のヒューマニズムが、その絵とあいまって、ハイカラな感じがするのに対し、ちばあきおのそれはいかにも人間くさい。おそらく、氏の満州からの引き揚げ、そして決して裕福ではなかったと思える、下町での少年時代の生活が、影響しているとみるのは、ほばまちがいないだろう。

ともかくこの作品は、ちばあきおのスタイルを決定づけた、エポック的作品である。

³ 「別冊少年ジャンプ」(集英社)

1971年(昭和46年)2月号掲載

このあとつづいて、108頁の少年草野球漫画『半ちゃん』⁴を完成させる。下手だが野球が大好きな半ちゃんが、野球チーム募集の貼紙を貼ってまわるところから、この物語は始まる。集まってきた少年達も、野球はそれほど上手くない。隣町のチームからの誘いで試合をするが、勝負にならぬほど簡単に負けてしまう。強くなりたいなアと思っている処に野球の上手いイガラシがくる。彼は隣町チームとの再試合を申し込み、チームの創立者ではあるが、一番下手な半ちゃんを降ろし、彼一人の活躍で試合に勝つ。イガラシの独善的ともいえるやり方に、みんなは反感を抱くが彼の實力の前に、野球の下手な彼らは何もいえない。イガラシの指導のもと、練習がつづく。半ちゃんはすでにレギュラーをはずされ雑用係になっている。だが、彼は不満を抱かない。みんなが野球をやっているだけで満足なのだ。毎日つづく本格的練習に、みんなは嫌気がさし、下手でもいいから以前の楽しい野球の方が良かったといい出し、チームワークは乱れ解散する。ちばあきおは、それぞれの状況における人間の心理を、丹念にかきこんでいく。数日後、またチーム募集の貼紙を貼る半ちゃんの姿がみられ、そろそろみんなくる頃なんだけどなあ……と、空地で一人つぶやくシーンで終わる。一見バカとも思える半ちゃんの人の好きに、ちばあきおは惜しめない愛情を捧ぐ。

4 「別冊少年ジャンプ」(集英社)

1971年(昭和46年)9月号掲載

ちばてつやは『阿Q正伝^{あきゅせいでん}』を読み、あきおにも勧めたという。先にも述べたし、単純な比較の上でのことだが、てつや氏は『阿Q』から社会性を読みとり、あきお氏は、より人間像に興味を抱いたように思える。そう推測すると、この作品には『阿Q』の影響がうかがえるのだがどうだろう。

昭和47年、ちばあきおは初めての連載漫画を開始する。大人気を博した中学野球漫画『キャプテン』である。(1年後、並行して『キャプテン』の主人公を高校に入れ、甲子園を目指す『プレイボール』も始めた)この作品は、戦後のスポーツ漫画の流れの中にあり、寺田ヒロオ⁶作品と比較された小文を読んだ記憶があるが、それは当時スポ根ものと称しスポーツは根性だ、という漫画(世間がいっただけで、作者はそう思っていないはずだ)が多く出て、その対極の位置にあった寺田作品と共に、さわやかさに相似点があるというものであった。寺田作品と較べ『キャプテン』の人間模写はもっと複雑で、それは時代の流れのせいかも知れない。

また『キャプテン』も根性漫画といえなくもないが、ただそれは、ギラギラした根性漫画ではなく、どこにでもいるような少年が、工夫を重ね成長していくという過程を、愛情を持って描く氏独自の語り口(コマ割り)は——上手い小説は、行間からも文章が伝わってくるといわ

⁵ 鲁迅の短編小説。1921年作。阿Qはこの小説の主人公。かれはいかに虐^{しいた}げられても、つねに勝利者と考えて自己満足し、ついにこのため死刑に処せられた。鲁迅は阿Qの精神を当時の中国人の奴隷根性の典型として描いた。(山川出版社 世界史小辞典)

⁶ 本名 寺田博雄 昭和6年8月4日生 漫画家。代表作に『背番号0』『スポーツマン金太郎』がある。第1回講談社児童漫画賞を『スポーツマン金太郎』で受賞。

れることがあるが、氏のコマ割りにも同じことがいえる——根性というような陳腐^{ちんぷ}な言葉を消し去ってしまう。氏には、あるがままの人間を愛することしか、考えられぬのだ。

『キャプテン』『プレイボール』の連載終了後、3年ほど休養をとり、昭和57年『ふしぎトロボくん』を連載する。

氏の内部にどんな劇が生じたのかは謎だがこれまで氏の描く主人公たちは、いかにも我々の周りにいそうな人間だったのに、この作品の主人公トロボは超能力者なのだ。動物と話すことが出来るのは勿論、大地と話が出来る人の心が読め、UFOを呼び宇宙人と友だちになる。ただトロボは、特に超能力を意識していない。非常に内向的な少年で、人間とのつきあいより、動物の方が気楽につきあえるのだ。

学校に入り、友だちも出来、トロボの心は次第に開いていくのだが、最初は珍しがられていた超能力も、心の中を読まれることでパニックになる。友だちはまたトロボをさけるようになり、学校を去ることになる。

この作品は、トロボの人間性を追うより、氏のやさしくみつめる人間洞察にうらうちされた、エスプリの効いた話を楽しめればいいと思う。連載時の人気は芳しくなかったと聞くが、もっと評価されている作品だと思う。

この作品のあと一転して氏は、これまでのテーマに戻り『キャプテン』のボクシング編ともいえる『チャンプ』を連載するのだが未完で絶筆となった。

7 ありふれていて、古くさくつまらないこと。

ドラマは人間心理の葛藤劇に他ならない。ちばあきおは少年の何気ない言動に、細心の注意を払う。一見無邪気に見える少年たちの心の葛藤を、氏はさりげなく描く。このさりげなく描くということが、いかに困難なことか。これは非常なテクニックを必要とすると思うのだが、氏の天性のものがそれを感じさせない。おそらくその根源にあるのは、氏のヒューマニズムであり、究極ちばあきおは、人間が好きなのだ。氏の目には、下町で遊んだ少年の日が、いつも映っていたにちがいない。

10年経ても古さを感じさせぬ作品群は、人間をみる氏のあたたかいまなざしがあるからで、氏が少年漫画に残した足跡はいつまでも残るだろう。近々、氏の全作品集⁸が出ると聞く。喜ばしいことだ。楽しみに待ちたい。

(付記) ちばあきおの作品群は、弟樹之氏との共同作業のものも多いと聞く。ここではちばあきお作品として統一させていた。御了承願いたい。

(「ちばあきおのすべて」―「キャプテン」から「チャンプ」までの軌跡―1994年9月24日発行、ホーム社出版より)

⁸ 1994年発行『ちばあきお名作集』(ホーム社刊)のこと。『チャンプ』全三巻。『ふしぎトロボくん』全五巻。短編集・全三巻

A・2 ちばあきお年表

西暦（昭和）	出来事
1943年（昭和18年）	1月29日満州・奉天（現在の中国・遼寧省瀋陽）で千葉家の三男として誕生。 本名…千葉亜喜生。
1946年（昭和21年）	6月、引き揚げがはじまり、奉天を出発。 7月、九州博多に到着。父の郷里、千葉県飯岡に落ち着く。
1947年（昭和22年）	8月、東京・小梅町（現在の墨田区向島二丁目）に父が家を新築。
1949年（昭和24年）	墨田区立小梅小学校入学。
1955年（昭和30年）	墨田区立墨田中学校に入学。
1957年（昭和32年）	江東区深川永代二丁目に引っ越す。
1958年（昭和33年）	墨田区千歳町に引っ越す。 4月、昼間はおもちゃ工場に勤めながら都立墨田工業高校夜間部に入學。 入学して間もなく、からだをこわし自宅療養する。 回復後は兄・てつや氏の漫画の手伝いをする。
1962年（昭和37年）	練馬区富士見台に引っ越す。

1971年 (昭和46年)	1970年 (昭和45年)	1969年 (昭和44年)	1968年 (昭和43年)	1967年 (昭和42年)	西暦(昭和)
			3月、結婚。妻、文江。 12月、初の海外旅行ヨーロッパへ。	『サブとチビ』で漫画家デビュー。	出来事
『ちよっきんちよっきんちよっきんちよっきんちよ』 『校舎うらのイレブン』 『半ちゃん』	『ニタリくん』 『いってきまゝす』 『ノンにおまかせ』 『愛の惨歌』 『フーちゃん』	『お兄ちゃん』 『気になるあの子』 『へんてこふたり』 『犬と少年』	『ピーター三世』 『お兄ちゃん』 『すてきな少女 マイ・オケイ』 『あかねちゃんとさくらちゃん』	絵物語『ポテンコ先生』 『リカちゃん』 『サブとチビ』 『それ行け、クミちゃん』	作品タイトル

西暦（昭和）	出来事	作品タイトル
1972年（昭和47年）		『みちくさ』 『キャプテン』
1973年（昭和48年）	5月、長女誕生。	『がんばらなくっちゃ』 『プレイボール』
1974年（昭和49年）	初単行本『キャプテン』発売。	『モウちゃんは強かった！』
1975年（昭和50年）	8月、長男誕生。	
1977年（昭和52年）	第22回小学館漫画賞を『キャプテン』『プレイボール』で受賞。	『モウちゃんはがんばった』 『磯ガラス』
1978年（昭和53年）		『プレイボール』完結
1979年（昭和54年）		『キャプテン』完結
1980年（昭和55年）		4月スーパーアニメスペシャル『キャプテン―白球にかける！ ぼくらの青春―』 8月水曜ロードショー『キャプテン―熱闘再び！ 墨谷対青葉―』

西暦 (昭和)	出来事	作品タイトル
1981年 (昭和56年)	9月、兄・てつや氏、赤塚不二夫氏、北見けんいち氏ら漫画家仲間とともに出生地である満州(現在の中国東北部)を訪れるツアーに参加する。	劇場版『キャプテン』(日本ヘラルド映画)
1982年 (昭和57年)		『ふしぎトロボくん』 『パパ』
1983年 (昭和58年)		テレビアニメ版『キャプテン』 (1月10日～7月4日)全26回
1984年 (昭和59年)	9月13日没。享年41歳。	『チャンプ』
西暦 (昭和)	出来事	
1985年 (昭和60年)	第一回東京国際映画祭(6月1日)で劇場版『キャプテン』上映	
1986年 (昭和61年)	ジャンプコミックススペシャル『キャプテン』(集英社)刊行全15巻	

2006 年 (平成 18年)	2005 年 (平成 17年)	2004 年 (平成 16年)	2002 年 (平成 14年)	1999 年 (平成 11年)	1996 年 (平成 8年)	1995 年 (平成 7年)	1994 年 (平成 6年)	1991 年 (平成 3年)	1989 年 (平成 元年)	西暦 (平成)	出来事
テレビアニメ版『プレイボール 2nd』	REMIIX『キャプテン』(ホーム社) 刊行	テレビアニメ版『プレイボール』 月刊コミック特盛『プレイボール』(ホーム社) 刊行	文庫版『チャンプ』(ホーム社) 刊行全2巻 月刊コミック特盛『プレイボール』(ホーム社) 刊行	月刊コミック特盛『キャプテン』(ホーム社) 刊行 文庫版『ふしぎトロボくん』(集英社) 刊行全4巻	文庫版『プレイボール』(集英社) 刊行全11巻	文庫版『キャプテン』(集英社) 刊行全15巻	ちばあきお名作集(ホーム社) 刊行全10巻	愛蔵版『キャプテン』(ホーム社) 刊行全15巻	愛蔵版『プレイボール』(集英社) 刊行全11巻		

A・3
あとがき

1997年にキャプテン谷口君の場面を文にしてからもう9年の歳月が経ってしまった。そうしている間に20世紀から21世紀に変わって世の中の流れがかなり速くなってきた気がするこの頃だ。原作者ちばあきおさんが亡くなってから多分だんだんとその作品は忘れられていってしまうと感じた人は少なくないであろう。しかしこの頃の状況はどうであろうか。『プレイボール』のアニメ化、新しい単行本(Remix)の発行と新しい世代の中にもちばあきお作品を指示する人が多いという現れであろう。

なにげなく作ったキャプテン谷口君編を読んでいる子ども達が目の前にいる。その子ども達の「続きはないの?」の純真な一言がこの丸井編をまとめる気にさせてくれた。大人から言われても動かない自分が子ども達から言われると動いてしまう。自分には気がつかないパワーがそこにはあるのだろう。

空想の世界に子どもを引き込んでイメージションをふくらませる物語はそれでいい。しかし現代はもっと、もっと現実生活の向上に目を向けさせるものをもっとたくさんあってほしいんじゃないか。中高校生における部活動は人間形成において大切な働きをしていることは誰もが認めることである。顧問の先生との出会いが部活動を決めるといわれるが、墨谷二中のようにキャプテンを中心に活動することが究極の目標ではないか。青葉学院の部長先生は現代においての教師の姿を現しているといつてよい。では墨谷二中の顧問の先生はどこにいるのだろう。

マンガにはでてこないがベンチに入れなかった70余名の部員とともに観客席で応援をしているに違いない。11名の部員につくよりは多数の方の指導を優先する先生なのであろう。それはある意味で当然のことである。谷口君の高校編『プレイボール』では野球部の顧問の先生が勉強面での指導で登場する。原作者ちばあきおが墨谷二中の顧問の先生を意識しなかったわけではないということがここからわかる。登場しない顧問の後を追いかけてみる。ある意味でその行動、立場は生徒と部活動顧問の関係として理想の姿かも知れない。そういえば競技は違うがラクビーの監督は試合中観客席にいるなあ。

文にまとまりがなくなってきたが、最後にこの丸井編をなぜか作らせるきっかけを作ってくれた一年一組の生徒達にお礼をいいたい。

「ありがとう！」

君たちの小澤という人間を動かしたパワーは、きつともっともっと大きくなって今度は自身に返ってくるはずです。

2006
年1月18日

文 小澤茂昌

キャプテン② 丸井キャプテンの巻

2006 年 1 月 18 日 初版第 1 刷発行

原作 ちばあきお

文 おざわしげまさ
小澤茂昌

発行者 小澤茂昌

発行所 和泉書院

郵便振替 00850-0-69925

落丁・乱丁本はありません。

定価はカバーに表示してあります。

Web-page: <http://plaza.across.or.jp/~furano>

mail: mailto:furano@po2.across.or.jp

